

『白い巨塔』と戦後復興から高度成長期の大阪の都市イメージ(二)

橋 爪 節 也

(承前)

本稿は、象牙の塔^レでの権力闘争と医師のモラルを問う山崎豊子(一九二四～二〇二三)の「白い巨塔」をテキストに、虚構としての文学空間に、戦前のモダニズムをひきついだ戦後復興から高度成長期の大阪がリアルなイメージの都市として、どのように立ち上げられているかを、前号につづいて検証するものである。

「サンデー毎日」連載中から「白い巨塔」は、読者と同じ時間を共有して進行する生々しい同時代小説^レであった。作品は、昭和三十八年(一九六三)から昭和四十年(一九六五)に連載されるが、読者の反響が大きく、昭和四十二年(一九六七)から翌年に「続白い巨塔」が執筆されて完結する。

裁判の原因となった佐々木庸平は、作中の「毎朝新聞」に昭和三十九年五月二十一日に入院、同月二十九日に手術し、六月二十一日に死亡すると報じられる。この年は東京オリンピックで日本全国が沸きたった年で、里見脩二が提出する退職届けの日付も「昭和三十九年十二月十七日」であり、連載期間と重なる。発売日ごとに読者は、物語のなかの大阪をリアルな現実の街と重ねて読んだと思われ、本作品をテキストに、当時の街の姿や生活を探ることに意義を見出すのはこの点である。また、ドキュメンタリーのような緊迫感に満ちて山崎がリアリズムを追求し、細部の設定にこだわるのは、浄瑠璃など古典芸能から西鶴の浮世草子、近代の織田作之助に至る大阪らしい文学観や表現論の系譜に位置することを実証するものと考えられる。

前号は、浪速大学医学部病院や教授たちの居宅について検証したが、

本稿では、重要な舞台となった料亭、バー、ホテル、会館、ホールなどに触れる。佐々木商店や花森ケイ子の住まい、財前の心象風景とも言える木津川河口にも言及し、水都大阪の物語らしく、海へ注ぐ河川が物語を彩っていることを指摘する。前号の章立ては以下の通り。

【前号の章立て】

はじめに

- 一、「白い巨塔」の成立、並びにドラマ化
- 二、浪速大学医学部病院と堂島川
- 三、財前産婦人科医院と財前五郎邸
- 四、里見脩二の公団アパートと兄・里見清一
- 五、浪速大学医学部教授たちの住まい
 - (一) 第一外科・東貞蔵邸
 - (二) 第一外科・名誉教授、滝村恭輔邸
 - (三) 病理学・大河内教授邸
 - (四) 形成外科・野坂教授邸
- 六、鶴飼医学部長と美術コレクション

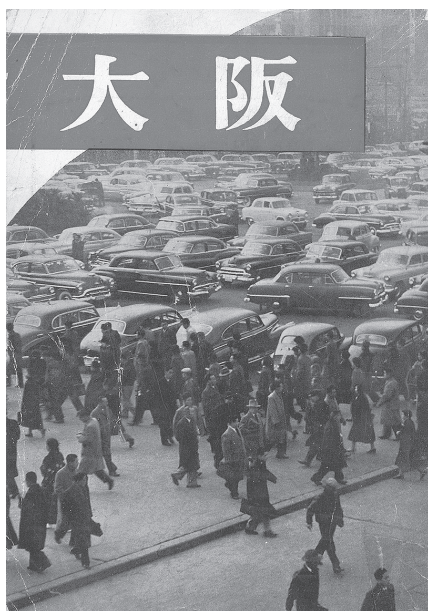
七、盛り場点描―料理屋とバーほか

「白い巨塔」では、病院建設や教授選、誤診裁判の対策、学会議、会員選挙などの作戦会議や慰労会の場として、北新地、南地、新町などの料亭やバー、ナイトクラブが登場する。街の雰囲気、店の規模、

格式など、教授の住まいの設定と同様に、大阪を知る同時代の読者にリアルなものに映ったに違いない。

昭和三十年代から四十年代の街を知るための資料として、昭和三十三年（一九五八）刊行の季刊誌「大阪」第一巻春季号（図1）をとりあげたい。「繁栄の街づくり運動」と「福祉の街づくり運動」の実践をめざす全国都市振興協会が「郷土の歴史的把握の上に描く／大阪のPR誌」を謳って刊行し、政財界の裏面を揶揄する口調もあるが、内容は、戦前の郷土研究誌の精神を受け継ぎ、広告欄の飲食店や宿泊ガイドは大阪への出張者も意識して編集されている。

同誌記事で料亭に該当するのが「お茶屋」だろう。巻頭特集「むかしの大阪・いまの大阪・これからの大阪」にある「カンミンの豪遊する街 宗右衛門町」の項に、「二流三流のお茶屋では失礼だ、キャバレーでは顔がさす、門外不出の一流お茶屋こそ、前者（筆者註、官公庁や企業の接待）にとつては、まことに好適の招待場所であり、豪遊の安全地帯でもある」とある。「御茶屋」は、花街に建ち並んだ揚屋を主に指し、芸妓などによる宴席での接客と料理を出した。東京では「待合」と呼ぶ。「白い巨塔」での会合の多くは料亭でもたれた。開かれた空間であるホテルや、プライベートであると同時に時には敵味方が同じ店内にいるバー、ナイトクラブの手軽な空間とは異なり、料亭は、機密性において限られたメンバーによる閉鎖空間として登場することが多い。



(図1) 季刊誌「大阪」第1巻春季号、昭和33年(1958)

料亭(小料理屋) 扇屋(大阪市北区曾根崎)

「お初天神の近くの、のれんに小さく「扇屋」と染め抜いた、こじんまりした料亭」で、もとは「北の新地の芸者」であった時江に又一がやらせている店である。

店名は、近松門左衛門『夕霧阿波鳴渡』を歌舞伎にした『廓文章』の夕霧太夫を抱えた新町の置屋「扇屋」と同じである。初代中村鴈治郎は実在した新町の「扇屋」に生まれ(新町に大阪市顕彰碑あり)、「白い巨塔」に先行する昭和三十四年(一九五九)の山崎の「ぼんち」に出てくる南地の幫間も「扇屋つる八」(「ぼんち」二九二頁、以下新潮文庫版による)である。「堂島中町」(第二巻八章三〇頁)にあった財前産婦人科からも近く、付近は「曾根崎心中」ゆかりのお初天神(露天神社)があり、「心中天の網島」の舞台でもある。芸達者な又一の

拠点にふさわしい立地であった。

女将の時江は、洋髪で年齢は四十歳前後、「ぼつてりと下ぶくれに肉付いた眼もとの涼しい女」である(第一巻二章八一頁)。時江が芸者をしていた北新地は、「きたのしんち」と発音し、南地、新町、堀江と並ぶ大阪四花街の一つであった。^①地域によって花街を「はなまち」と読むが、大阪は「かがい」と発音する。北新地は「曾根崎新地」とも呼ばれ、「北陽」とも表記する。

明治以降、芸妓の芸を披露する演舞場の設置が、花街として認可される法的条件となった。明治五年(一八七二)、京都博覧会開催に際して祇園では「都をどり」の名で芸妓舞妓の総踊りを開き、大阪では、明治十五年(一八八二)に北新地が「浪花踊」を、明治二十一年(一八八八)に南地五花街が南地演舞場の落成記念に「芦辺踊」を創設した。堀江は「木の花踊」である。

明治二十三年(一八九〇)、北新地の演舞場が焼失し、明治二十六年(一八九三)に演舞場を開いた新町が、了解を得て「浪花踊」の名称を継承する。しかし、大正四年(一九一五)に北新地は演舞場を再建し、四十五年ぶりに「浪花踊」を再開した。新町の総踊りは「新町浪花踊」となる。再建された「北陽演舞場」は、桜橋交差点の西南にあり、空襲で焼失したが、同じ桜橋交差点から見える財前産婦人科とも近い位置にあった。建物は「藤原時代より室町及桃山時代を貫く代表的建築物の粹を巧に織り交ぜた御殿風とも稱すべきもの」で、菅橋彦や木島桜谷、猪飼嘯谷らが襖や杉戸ほかを描いた。^③北新地は芸所で

あり、織田作之助「夫婦善哉」の蝶子は、ここで「おちよぼ（芸者の下地ツ子）」から芸妓となって、梅田新道の化粧品店の柳吉と出会っている。

昭和三十年代前半の北新地については、前述「むかしの大阪・いまの大阪・これからの大阪」のなかの「かわったうめだ附近 梅田界隈」に記される。

北陽と謳われた曾根崎新地は戦災後、全く花街としての様相を変えてしまった。

弦歌さんざめき艶な姿の芸妓が行きさした表通り（高橋盛大堂の横から桜橋筋の電車道まで）に軒を並べていた、お茶屋も、いまは跡形もなく和洋折衷の家屋がならんで、お茶屋が転業して高級料理家やバーとなり所謂、花街としての雰囲気は街のどこにもない。

それでも此の附近は大衆の娯楽街ではなく、公用族社用族の巢窟として相当以上の繁栄を極めつつある。

勿論料亭には芸妓が検番から送られ散財にはこと欠かない、すたれたとは言っても矢張り北陽は曾根崎廓時代の流れを汲む名妓もあって芸能は盛んである。ここの高級料亭も南地のそれとおなじく一現の客はとらないので公杜用族の密談会合場所としては好都合のところだけに梅田界隈の発展につれて甘い汁を吸っている。（「大阪」全国都市振興協会、一九五八年）

空襲で街並みは変わったが、花街の雰囲気は残り、高級料亭が一見の客をとらないことが記されている。しかし十年後、大阪万博開催を意識した『新しい大阪』（カラーブックス一八六、保育社、一九六九年、図2）には、「曾根崎新地」として、江戸時代から花街として栄えたが「十数年前から花街としての特色を失い、東京の銀座に比肩する高級バーや料亭街になった。／ときおり、左ズマをとった島田姿の芸妓を見かけるが、若い人たち、テレビの時代劇でも見ているかのような目で眺めている。」として、その後の変貌を伝える。『北新地社交料飲協会五〇周年記念誌』⁽⁴⁾でも、座談会において、同協会ができた昭和三十七年頃に、御茶屋に代わって、ダンスホールやキャバレーが進出したとする。

「扇屋」が最初に登場するのは、二章で財前が又一にはじめて連れて行かれ、教授選の応援を依頼するため、大阪市北区の医師会長・岩田重吉と引きあわされた時である。岩田は、鶴飼と浪速大学同期の内科医で、同窓会の重鎮である。医師会副会長が又一であった。この席でも密談の後、二十歳そこそこの芸者、小萬、メ子、春千代、みつ葉が座敷に招かれた。

教授選挙応援のため、医局長の佃をはじめ古参助手が集まったのも「曾根崎の小料理屋の二階」であり、財前が会計をすべて引き受ける（第一巻第六章三三七頁）。店が「扇屋」であったことは次の箇所に分かる。

医局内工作のために、佃たちが、最近、毎晩のように財前の舅

うや、これから宗右衛門町へ席を替えて、景気付けの散在しようやないか」(第四卷二三章五九頁)と提案したことである。「扇屋」での会合は「ものものしい空気が漂っていた」(第二卷一〇章一六三頁)、「扇屋の奥座敷は気まずい気配に包まれ」(第四卷二八章四九六頁)など、緊迫した場面が多く、席を替えて散財しようという又一のひとことで、大阪の町医者者のプライベートルームな空間であった「扇屋」が、遊びの場から会議室や事務的な空間に変質していることが分かる。

財前の臨終で「五郎、わしが悪かった、わしが無理をさせたのや、死なんといてくれ！」(第五巻終章三九七頁)と号泣する又一が、財前の死後、「扇屋」に足向けることができたかも知像をかき立てる。

料亭 萬力(大阪市北区)

「扇屋」とは異なり、北新地でも本格的な料亭が「萬力」である。物語前半では、教授選挙の当確を祝う会が開かれた。

北の料亭『萬力』の奥座敷で、財前教授決定を祝う宴席が賑やかに開かれていた。床の間に背に、鵜飼医学部長と財前五郎が坐り、その両側に産婦人科の葉山教授、同窓会役員の岩田重吉、鍋島貫治、それに財前又一の順で座を占め、座敷机の上には、目の下二尺五寸の見事な鯛の生作りが据えられていた。(第二卷十一章一九一頁)

続いて、ドイツでの国際外科学会出発前の「財前教授渡欧壮行会」も「萬力」で開かれる。

コの字型の正面には、鵜飼医学部長と財前五郎が坐り、財前の隣に岩田重吉が司会役のような形で坐り、三人を中心に、左側に産婦人科の葉山教授をはじめとする教授選で財前支持に廻った教授たちがずらりと並び、右側には、鍋島貫治を中心に浪速大学医学部の同窓会の有力メンバーが顔を揃え、十人の芸者がお酌に坐っていた。財前又一は、一番末座に控え、次々に運ばれる料理と芸者の出入りに、そわそわと眼を配っていた。(第二卷十四章三六〇頁)

壮行会の宴席で、柳原からの電話を若い芸者がとりつぎ、それを財前に伝え、「座敷の前の廊下の隅」にあった電話室で財前は柳原を叱りつける(第二卷十四章三六五頁)。この電話は、先述の「扇屋」での裁判の打合せで問題となり、「料亭の仲居が、たまたま背後を通り合わせて、電話を聞くと言うこともあり得」と問われ、又一が「わしが明日にでも遊びに行つて、あの時のことをそれとなく詳しく調べ、工合の悪い仲居や女中がおつたら、ちゃんとうまい口封じもして来まっさかい」(第四卷二六章三〇九頁)と答えている。

物語後半では、財前と鵜飼、奈良大学の竹谷医学部長の三人で、裁判の鑑定人依頼の話と、学術会議の相談が「萬力」で行われる。竹谷

は浪速大学で鶴飼の三年後輩にあたり、学術会議選挙には全国区から立候補した。

冷房のきいた座敷の襖が開き、仲居が二人入って来、椀物の料理を膳に置いた。金蒔絵の見事な椀であった。食い道楽の竹谷と鶴飼は、一しきり食べものの話を始めた。(第四卷二八章四六四頁)

この席には、電話の件で口止めた仲居の「お絹」が酌にあらわれ、「万事含んでいるような眼もと」を財前に見せている(第四卷二八章四六五頁)。学術会議会員選挙に当選した直後、鶴飼、岩田、鍋島、財前父子で「当選御礼の一席」を設けたのも「萬力」であり(第五卷三三章二〇三頁)、力でねじ伏せるようなイメージの店名だが、物語中、最高級の料亭として設定されている。

モデルとなった料亭が実在したかは分からないが、戦前の花街の店と芸妓を網羅した、昭和十三年(一九三八)の豊島康世編『花柳界便覧 萬華大阪版 萬華』(萬華通信社出版部)に「宴会会席料理」として載る北新地界隈の店を上げると、いせ半、宝月楼、魚岩楼、魚音楼、ゑびす、静観楼、錦潟、かどの、多幸平、上清、現長、しん猫、菱徳などがある⁽⁵⁾。御茶屋の多くは仕出しだが、魚岩楼は堂島の有名料亭で、美術団体などの記者発表の会場にも用いられた⁽⁶⁾。

戦後は先述「大阪」にある広告欄の「高級・御料理」に、東区の北浜、高麗橋、今橋などの花外楼、吉兆、堺卯、つる家、灘万や、南地

の宗右衛門町の新播半、新市が掲載されるが、北新地で載る店はない。高級料亭が北新地にないのではなく、接待や密談が多く、一見の客を避けたい店側の配慮と解釈するべきかもしれない。

店名は記されないが、「一般実地医家(開業医)向けの循環器疾患の講演会」の後、講師に招かれた鶴飼と洛北大学の神納、近畿医大の増富が、平和製菓の接待を受けた店も「北の料亭」である(第四卷第二六章二三九頁)。講演会謝礼は「水引のかかった金五万円也の謝礼袋」で三人に渡された。神納は学術会議選挙に出る予定であり、増富は近畿医大から立候補する重藤の選挙参謀である⁽⁷⁾。

なお「萬力」の座敷は「冷房のきいた」部屋とされている。現代では室内の空調機は一般的だが、「白い巨塔」では「冷房」が何度も明記される。芦屋川の東の自宅は、「室内温度十七、八度」(第四卷二七章三六〇頁)と設定温度が記され、柳原が見合い相手の野田華子と会った心斎橋筋の喫茶店は、フォークソングが流れ、「冷房のきいたしゃれた雰囲気の音楽喫茶」(第四卷第二八章四五二頁)であり、後述のケイ子の住まいや、国平の乗る高級自動車でも冷房に触れている。

冷房設備は、昭和初期には道頓堀の中座や千日前の新歌舞伎座をはじめ、劇場や店舗に見られるが、「白い巨塔」の時代は一般にも普及しはじめた頃で、ある種のステイタスを示す機器として記されているのだろう。

山崎豊子本人も暑さ寒さに弱く、「女系家族」⁽⁸⁾執筆のため六甲山のオリエンタルホテルに滞在したり、「白い巨塔」の執筆にかかる直前

の昭和三十八年七月末に、浜寺の自宅とは別に六甲山上に山荘を新築し、そこで創作にはいつている。⁽⁹⁾「冷房」へのこだわりには体質も反映されているかもしれない。快適な六甲山の山荘では、「白い巨塔」というタイトルの決定と、「進行表」の作成という創作方法の確立がなされた。

料亭 鶴の家（大阪市西区新町）

上本町二丁目の電停近くに大阪府医師会館があり（第四卷二六章二六四頁）、北区医師会のあと一階講堂で鶴飼の講演会『老人病、特に高血圧と肥満について』が開催される（第一卷四章二二九頁）。講演後、岩田と又一が鶴飼を新町の「鶴の家」で接待し、店の様子は、「新町の『鶴の家』」に着くと、女将と仲居が出迎え、二間続きの奥座敷に接待の用意がしつらえられ、庭にも打ち水が打たれていた。⁽¹⁰⁾（第一卷四章二三三頁）と記される。席上、第一外科の後任人事の話になる。「鶴の家」には、これ以外に滝村名誉教授の喜寿の会のあと、岩田が鶴飼を呼び出している（一巻六章三七二頁）。

「廓文章」や夕霧太夫で有名な新町は、京の島原、江戸の吉原と並ぶ大阪最古の廓で、幕末の錦絵揃物「浪花百景」に「新町店つき」「新町廓中九軒夜桜」（図3）が描かれる。近代は「浪花踊」を開催し、「北陽演舞場」の復活後は、「新町浪花踊」に改称した。⁽¹¹⁾大正十一年（一九二二）、片岡安の設計でセセッションの影響を受けた鉄筋コンクリートの「新町演舞場」が竣工している。



（図3）芳瀧作「新町廓中九軒夜桜」、「浪花百景」より

山崎豊子は「ぼんち」（一九五九）で「新町は、船場と隣接した大阪の最も古い花街で、大屋根が低く垂れ、細目格子が長く列なり、どっしりした構えであったが、薄暗い重さがあった」（「ぼんち」二二八頁）とし、主人公の河内屋喜久治の行きつけとして「富乃家」「金柳」「米田屋」など、戦前の新町の御茶屋が登場する。

「富乃家」は「河内屋の地方の取引先を招待する待合」で「こぢんまりとした構えであったが、普請が通り、庭木に丹念な手が入っていた」（「ぼんち」六七頁）、「金柳」も「富乃家と同じように小ぢんまりとして客筋のいい待合で、富乃家の一つ南の通り」（同一四九頁）にあった。「米田屋」の名前は、「廓文章」の舞台となった揚屋の吉田屋がモデルかもしれない。新町も空襲で焼失し、戦前のような形には復興せず、石濱恒夫『大阪诗情 住吉日記・ミナミわが街』（朋興社、

昭和五十八年)には、小川屋の女将の「戦後、九軒へ吉田屋さんが戻って来はって、しばらくして、やめはって、それから、さびれてしもたんです」という談話が書き留められている。

「鶴の家」には、誤診裁判の相談で、河野正徳弁護士、鵜飼、財前、又一の四人が集まる(第三卷一八章一六〇頁、同一九章二二三頁)。医学部長や弁護士会会長など実力者との最初の会合で「鶴の家」が用いられるのは、新町の歴史と格式が、まだ生きていたのかもしれない。

バー・ラディゲ (大阪市北区)

桜橋の近く、ビルの階段を降りたところにあり、和歌山市民病院に
出向する無給助手の送別会が開かれる。

ラディゲの中は、客がたて混みはじめる時刻で、入ってすぐ右手にあるバーの前に、何人かの男たちが腰をかけたり、肘をついて並んでいた。文学ファンのマダムの好みで、渋い薄茶^{ベージュ}の壁とカーテンで統一された比較的静かなバーで、客たちも、大学関係者とか、新聞記者、放送関係のプロデューサーなどの常連が多かった。

(一巻一章三二頁)

店名の由来となったレイモン・ラディゲ(一九〇〇～一九二三)は、フランスの小説家、詩人で、「肉体の悪魔」「ドルジェル伯の舞踏会」で知られる。特に「ドルジェル伯の舞踏会」は、昭和六年(一九三一)

堀口大學の訳が刊行され、堀辰雄、横光利一、三島由紀夫、大岡昇平に影響を与えたとされる。戦後も生島遼一訳(人文書院一九五一年)、江口清訳(河出書房一九五二年)、鈴木力衛訳(岩波書店一九五七年)が続けて刊行され、小説家を志した若き日の山崎も注目しただろう。

大学関係のほか常連客に、新聞記者、放送関係のプロデューサーが多いのは、四つ橋筋沿いの桜橋や中之島に毎日新聞社、朝日新聞社、サンケイ新聞社や、朝日放送、毎日放送、ラジオ大阪があったことによると思われる。教授選では、反財前で革新派を標榜する整形外科の野坂、皮膚科の乾、小児科の河合が教授選の選考委員会後と決選投票前の打ち合わせで来店している(第二卷八章三四頁、同九章一四三頁)。

バー・アラジン (大阪市旧南区／現中央区、宗右衛門町)

財前の愛人である花森ケイ子がホステスとして勤めるのが、宗右衛門町の「バー・アラジン」である。女子医大を中途退学したケイ子は医学知識に富み、財前のよき理解者であった。「千夜一夜物語」になむ店名は、魔法のように社会的成功が進むことへの願望をイメージさせる。

店のある宗右衛門町は「南地五花街」の中心で、新町、堀江、北新地と並べて「大阪四花街」と言う場合は、道頓堀付近の五つの花街を一個と数えて「南地五花街」と呼ぶ。ここに遊所ができた起源は不明だが、天保十三年(一八四二)に一度、茶屋・風呂屋は移転し、安政四年(一八五七)に復活したとき、茶屋株が五十軒許可された。⁽¹⁴⁾ 宮本

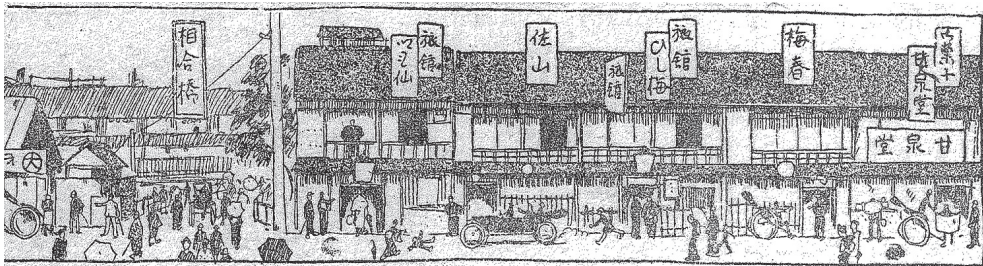
又次は、明治後半まで宗右衛門町には、道頓堀川に面した浜側に家屋がなく、柳が植えられた芝生であったとする。それが明治三十六年（一九〇三）の第五回内国勸業博覧会での観光客の増加を見込んだ府知事と大阪市長の尽力で、浜側への御茶屋新設が許可される⁽¹⁵⁾。

また、明治三十年代半ばに宗右衛門町の通称十軒路地で、少年期を過ごした宇野浩二（一八九一―一九六二）は、自伝的小説「清二郎 夢見る子」で、大火で町が焼けたことを語る⁽¹⁶⁾。

宗右衛門町焼のあったのは、さう遠い事ではない。その名残は、相合橋と千年町との間、戎橋と太左衛門橋との間に、――片側は無論美しい新築のおちや、やの軒が並んで居たけれど――その川に沿うた側に残つて居た。

それは往来と川との間になつて居て、川の方に向つて緩い傾斜をなして居た。荒れ果て凸凹した中に、此辺には珍しい、まだらに草が生へて居て、所々に柳の木々などが植はつて居た。（中略）

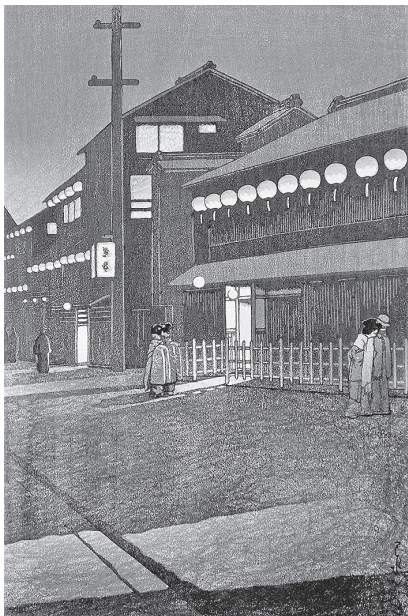
私の来た頃は宗右衛門町焼のあつて間もなくで、その川岸は、長らく荒れ果てた草原のまゝになつて居た。川に沿うた道、宗右衛門町は片側だけが美し



いちやや町で、片側は相合橋と千年町との間、戎橋と太左衛門橋との間に、焼跡の荒廃した草原を残して居た（四五五年後には新しいおちや、やの軒が並んだけれど、その頃その焼跡を人々は又小さく浜と呼んで居た。）（宇野浩二「清二郎 夢見る子」）

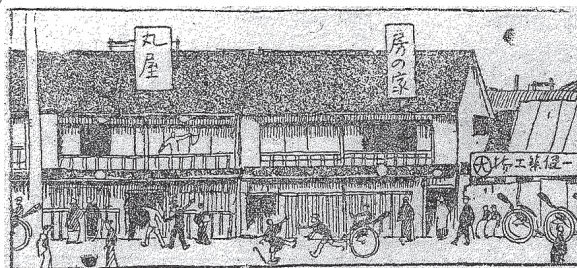
宇野のいう四、五年後は、第五回内国博の時期と一致する。宇野は『夜の京阪』（文久出版部、一九二〇年）の「大阪の花街」や、『新風土記叢書Ⅰ大阪』（小山書店、一九三六年）でも詳しく少年時代の道頓堀や宗右衛門町を語っている。

浜側に建物が並ぶ大正時代の様子は、道頓堀雑誌社の「道頓堀」のイラストに描かれる。畳屋町角の富田屋、笠屋町角の大和屋など大茶屋を中心に街並みが整っていることが分かり、浜側に工事中の箇所がある（図4⁽¹⁷⁾）。里見淳は近くに住んで芸妓の山中まさと結婚し、「妻を買ふ経験」（一九一七年）を発表した。大正末の調査では、宗右衛門町には芸妓置屋七軒、貸座敷七十一軒あり、娼妓はおらず芸妓のみ五九八人が確認されたとされる⁽¹⁸⁾。しっとりした花街の雰囲気は、島成園（一八九二―一九七〇）が第六回文展（一九一二年）で褒状を受けた『宗右衛門町の夕べ』や、昭和八年（一九三三）の川瀬巴水



(図5) 川瀬巴水『大坂宗右衛門町の夕』
昭和8年(1933)個人蔵

『大坂宗右衛門町の夕』(図5)にもうかがえる。
先に触れた「ほんち」にも、大正十五年頃の設定で宗
右衛門町の「美濃屋」「浜ゆう」などの御茶屋が登場し、
山崎は、重厚な新町に対して、「宗右衛門町は、新町の
花街とはまた異なった情緒を持っている。」「宗右衛門町
は、新しい花街らしく、家の造りに明るい広さがあり、
心斎橋筋と繋がった繁華さがここにあった。」「(ほん
ち)」「(二二八頁)」とする。「新しい花街」であるのは、浜
側が出来たことが新しいことに加え、芸妓によるモダン
な河合ダンスを創設した御茶屋の「河合」があったこと
や、北尾録之助『近畿景観第三編 近代大阪』(創元社、
一九三二年)に「大阪における近代的流行の歩く」とこ



(図4) 雑誌「道頓堀」のイラストに
描かれた大正中期の宗右衛門町浜
側。相合橋の北詰が工事中である。

ろとされる心斎橋筋と接していたことも理由だろう。
戦後は宗右衛門町の雰囲気も変わり、「大阪」の巻頭
特集は、「メトロ」など巨大なキャバレーをとりあげる。

これぞ古風な浪華情緒をケシ飛ばす一九五八年の
キャバレーで、二次会の公用族や社用族を美女が濃
艶な媚びで引寄せる。宗右衛門町の一流お茶屋式に、
一夜数十万金とはいかぬが数万金位は、ヘッチャラ
に消費さす、夢の国、歓楽の殿堂、大キャバレー、
グラウンド等々が横引して、戦前のお茶屋の領域を完
全に浸して仕舞ったようだが、これらが今の宗右衛
門町を形成しているともいえる。(カンミンの豪遊
する街 宗右衛門町、「大阪」)

マンモスキャバレーに勤めたダンサーやホステスは、
戦前のカフェやダンスホールの「女給」の系譜に属する
と思われ、花登筐(一九二八―一九八三)原作でテレビ
ドラマ化された「ぬかるみの女」も、昭和三十年代の宗
右衛門町「メトロ」が舞台であった。この時代はキャバ
レーに対してアルバイトサロンも誕生し、「大劇地下サ
ロン」の支配人である磯田敏夫の『ネオン太平記』
(六月書房、一九七一年)が映画化された。

先に挙げた保育社の『新しい大阪』（一九六九年）は宗右衛門町を、かつて大阪一の花街として栄えたが、「ここの時代の流れに勝てずキャバレー、バーが多く、夜ともなれば車で人が通れないくらい。北へ曲がると、千年町、玉屋町、畳屋町。いずれもバーの町として深夜まで嬌声が聞こえ、ミナミの夜の顔ともいえる。しかし、春には南地芸妓の意地を見せる『あしべ踊り』が朝日座で行われる」とする。また南地は、北新地と比べて年配の客が多く、クラブなどでも北新地での客との対応がスピーディであるのに対して、挨拶などもゆっくりするのが通例だったという。⁽²¹⁾

「バー・アラジン」が最初に登場するのは、五章である。

道頓堀川に面したバー・アラジンの中は、適度にきいた冷房と、程よい混み方で、快適な雰囲気包まれていた。経営者のマダムが、大阪財界人の中でも著名な製鉄会社の社長の持ちものであったから、選りすぐった客筋が集まり、お茶屋の宴席の帰りに一、二時間ほど遊んで、さっと帰る連中が多く、悪ふざけや下卑た遊びをする酔客の姿などは見受けられない。（第一巻五章二七三頁）

風俗色が強い巨大キャバレーとは異なり、品格を保った高級店として「お茶屋の宴席の帰りに一、二時間ほど」寄るものと記されているのが重要である。教授選では医局長の佃と古参助手の安西が、菊川に教授選を辞退させる作戦をこの店で練った（第二巻九章九九頁）。店

は物語後半の二六章にも登場する。

道頓堀川に面したバー・アラジンの中は、柔らかな間接照明と薄茶の皮のソファを置いた品のよい雰囲気包まれて、何時ものように大阪財界の有名な社長たちの顔が見え、程よく混んでいた。マダムが大阪財界の中でも大物といわれる製鉄会社の社長の囲い者であったから、客筋が選りすぐられているのだった。（第四巻二六章二六四頁）

マダムを「大阪財界の中でも大物といわれる製鉄会社の社長の囲い者」とするのが、本稿最後に触れる木津川河口の製鋼所や、数年後に「週刊新潮」に連載（一九七〇～一九七二年）が開始される「華麗なる一族」の万俣大介、阪神特殊製鋼に勤める息子鉄平を連想させる。

店の位置は、近鉄上本町六丁目駅から里見が、財前の誘いでタクシーでアラジンへ向かう場面「道頓堀橋の上で車を停め、心齋橋筋を半丁程東に横切り、財前はバー・アラジンの扉を押した」^{ドア}（第五巻三〇章七九頁）で分かる。道頓堀橋は御堂筋に架かる橋で、心齋橋筋から「半町程東」とあるので、心齋橋筋と畳屋町の間の浜側である。当時、戎橋北詰にあったキリン会館⁽²²⁾の東隣の何軒目かにあたり、宗右衛門町でも繁華などところである。

「白い巨塔」では、交通傷害専門でメデイアによく登場し、学術会議選挙に立候補する近畿医大の重藤も、新日本テレビの専務と来店し

た(第四卷二六章二六五頁)。「東大阪市の住宅が建ち並んだ一角に、ぼつんと千五百坪程の空地」があり、そこに建設される近畿医大の附属病院の分院に重藤の「交通傷害センター」は新設されている(第五卷三〇章九三頁)。

料亭 増田屋(大阪市旧南区/現中央区島之内二丁目か)

東都大学の船尾教授から東に、「人目にたたぬ料亭」で第二外科の今津教授もまじえて面談したいという連絡があり、東は御堂筋を南へタクシーで「増田屋」に向かう。当時の御堂筋は、現在のような南行一方通行ではなく、対面通行であった。

夜の灯りがついた宗右衛門町を左へ入り、道頓堀川沿いの料亭『増田屋』へ付くと、東より先に今津が来ていた。(第二巻十章 一二八頁)

この料亭もモデル未詳である。先にあげた大正時代の雑誌『道頓堀』のイラストでは、宗右衛門町浜側に西から東に「パウリスタ」「料理ひとみ」「西洋料理浪花亭」、北側東から西に「料理猩々亭」「御料理魚復」「精肉御料理皎日」「精肉すき相生」「料理はり半」「料理万花」が描かれ、『花柳界便覧 萬華大阪版 萬華』の「宴会会席料理」では、宗右衛門町界限には、「琴福喜(南地)」「はり半(南店)」「万花」などが載るが、隣接する場所にも料理屋が多く、「吉兆」なども戦前は、

豊屋町に店舗を構えていた。戦後の宗右衛門町の料亭として宮本又次は、鰻で知られる「菱富」をあげるが、人目にたたないという条件ではない。

教授選に破れた東と今津の慰労会も「増田屋」であった。気になるのが次の一節である。

横堀川の水がひたひたと冷たく寄せる川べりの料亭の座敷に、東と今津は沈みきった面持で対ひ合っていた。(第二巻十一章 一九七頁)

横堀川は、島之内の東を流れる「東横堀川」か、西を流れる「西横堀川」を指す。宗右衛門町は心斎橋筋から堺筋までを指すので、横堀川に近いとすれば「増田屋」は、タクシーで御堂筋から宗右衛門町を左折し、そのまま堺筋を越えて、「東横堀川」が折れ曲がって道頓堀川になる下大和橋付近をイメージしているのかもしれない。堺筋以東の当時の町名は南区大和町であり、幕末明治、金比羅宮参詣の船が出る宿屋街であった。⁽²⁵⁾「萬力」での財前の祝勝会に顔を出した野坂も「増田屋」に姿を見せ、これら南地の店は、北新地と立場を変えて重なりあい、物語を空間的に重層化する。

「川べりの料亭」のイメージだが、「ばんち」では「美濃屋」で主人公が道頓堀を眺めていると、「太左衛門橋の方から、舳先に大きな提燈をつけたボートが漕ぎ上ってきた。喜久治の坐っている座敷の前あ



(図6)「大大阪観光」(昭和12年)に写された道頓堀の貸しボート。正面が戎橋。

の場であり得たことが分かる。夜の道頓堀の川面と店との飲食物のやりとりは、上司小剣「鯉の皮」(一九一四年)にも警官の船に鰻と飯を吊り降ろして差入れる場面があり、道頓堀らしい風物として山崎は「ぼんち」に書き加えたのだろう。

ボートは貸しボートで、昭和七年(一九三二)の浅野竹二の版画《新大阪風景(一) 道頓堀夜景》に描かれたり、昭和十二年の映画「大大阪観光」にも写され(図6)⁽²⁶⁾、太左衛門橋の方から漕ぎ上がってきたことから、「美濃屋」は太左衛門橋の上流、相合橋との間と想像され

たりに来ると、急にオールを置き、二十歳ぐらいの男が伸び上がった、座敷の中を覗き込んだ。喜久治は退屈しのぎに、ビール瓶を振って相手になった」という場面があり(二三三頁)、大正末昭和初期の道頓堀川が、まだ川そのものとして遊び

る。太左衛門橋には、初代中村鴈治郎の座付き作者で「番傘」同人だった食満南北(一八八〇―一九五七)の「盛り場をむかしに戻すはしひとつ」の句碑が、昭和三十六年(一九六一)に橋の北詰に建てられた。山崎が大阪を題材に作品を発表していたこの時期は、藤澤桓夫と田村孝之介共著の画文集『大阪 我がふるさとの……』(中外書房、一九五九年)、鍋井克之の画文集『大阪繁盛記』(布井書房、一九六〇年)、『大阪ざらい物語』(布井書房、一九六二年)など、戦前を回顧して現代を語る書籍も刊行され、南地情緒を再顕彰する機運があったことが確認できる。

しかし、昭和三十年代から四十年代の道頓堀川は上流からの排水やゴミの不法投棄で汚染され、災害対策や美化のための改修工事が昭和四十一年(一九六六)に始まり、翌年にグリーンベルト(舟型護岸)



(図7) 日本橋上流に残る道頓堀川のグリーンベルト(写真右)。正面の日本橋をくぐった向こうが遊歩道として親水空間になったのとは比べ、橋の手前に残るグリーンベルトが、街と川とを断絶していることが分かる。船上より著者撮影、2018年。

が完成する。昭和四十五年の万博を意識した都市改造であるが、道頓堀川東端から下流の大黒橋までの約一・二キロが、幅四メートルのグリーンベルトで遮られ、市民は直接水面に触れることができなくなった(図7)。東横堀川の両岸も同じ工事が進められ、道頓堀のグリーンベルト建設については、石濱恒夫(一九二三―二〇〇四)が『大阪ろまん』(全国書房、一九六七年)の「道頓堀の死」「道頓堀ブルース」で触れている。

夜の道頓堀のネオンは魅力的であったが、現実の「川べりの料亭の座敷」は窓を開けると臭気がきつかったのではなかったか。けれども、教授選の敗者の心に「横堀川の水がひたひたと冷たく寄せる」ことを皮膚感覚でイメージさせ、親水空間としての料亭を、グリーンベルトで失われる直前に書きとめたのが「増田屋」の場面であった。

バー・シロー (大阪市中央区、東心斎橋)

東は病院の正面玄関へ出ると、玄関横に駐車しているタクシーを拾い、御堂筋を心斎橋の方へ向かって車を走らせた。

清水町の角を東へ折れ、二丁ほど行ったところで車を停め、バー・シローの扉を押した。まだ五時過ぎであるせいか、何時もは混みすぎるほど混んでいる店ががらんとして、^{ひとけ}人氣がなかった。

(第一巻一章二二頁)

東と鵜飼が文部省対策を練るときに使ったバーで、「鵜飼と二人で、浪速大学附属病院の新館増設の認可を、文部省へ働きかけた頃のことを思い出した」とある。店の位置は、「心斎橋画廊」のモデルとなった「島之内画廊」に近く、「バー・シロー」のモデルも付近にあった可能性がある。⁽²⁸⁾

大丸心斎橋店の南側の東西の通りを清水町と呼ぶが、興味深いのは心斎橋筋から一丁半東に入ると北側に、戦前は吉本興業の文芸部があつて秋田實や長沖一が所属し、南側には、織田作之助「世相」に登場するスタンド酒場の「ダイス」があつたことになっている。⁽³⁰⁾戦後、付近には、昭和二十三年(一九四八)に里見勝蔵の随筆集『画魂』を刊行した大丸百貨店の大丸出版社もあり、⁽³¹⁾街なかでの文化的な拠点の一つであつた気配がある。

東は、別の日にも鵜飼と呼ばれ、「東は病院の前に駐車しているタクシーを拾って御堂筋を南に向かって走らせ、清水町の角を二丁ほど東に入ったバー・シローの前で車を降りた」(第一巻四章二四七頁)とある。このとき文部省の原次官に附属病院新館のことで会い、定年後の就職先として新設中の近畿労災病院院長就任の件では、大阪財界人である日東レーヨンの池沢社長に話し、弟で東京都医師会から当選した医系議員の池沢衆議院議員に後押しを依頼するよう言われる。

後で、洛北大学第二外科の教授が「労働省関係の重要な筋をおさえ、東に内定している院長の椅子を覆しかかっているという情報も入るが(第二巻一二章二二五頁)、結果的に東は「サンルームのような大

きなガラス窓に囲まれ、五月下旬の陽光が踊るような明るさで部屋一杯に溢れている」とされる「近畿労災病院」の院長室の主におさまった（第四卷二五章一七八頁）。

「近畿労災病院」のモデルは、昭和二十五年（一九五〇）に尼崎市が中心となって国に要望し、労働省所管の労災病院として昭和二十八年に診療を開始した関西労災病院（現・独立行政法人労働者健康安全機構 関西労災病院）と思われる。尼崎市稲葉荘にあり、昭和三十五年に総合病院となるとともに、昭和四十年の第一期工事、昭和四十二年の第二期工事で東西の病棟を新設した。「白い巨塔」連載の時期と重なる。

小説内の出来事として、浪速大学医学部附属病院新館、近畿労災病院、近畿癌センター、近畿医大附属病院分館などが新しい病院や病院新館建設が並行して進められるが、モデルとなった病院もこの時期に新館建設を進めており、高度成長期における医療体制の整備促進が、小説の創作背景にあることが確認できる。

ナイトクラブ・リド（大阪市北区）

物語後半で登場する店で北新地にあり、繊維会社の社長の退院祝いと製薬会社の招待などで、財前が二、三回いったクラブである。「製薬会社の連中の出入りが多い」（第四卷第二七章四〇二頁）とも語られている。店名は、パリのシャンゼリゼにある有名なキャバレーでディナーショーを開発した「リド」からとっている。海外のクラブの華麗

なショーについては、一五章に国際外科学会での出張中、ベルリンの「ナイトクラブ・レジ」の様子が記されている⁽²⁸⁾。

ケイ子との距離が少し開いた時期に財前は、「ナイトクラブ・リド」のホステス加奈子と六甲山山上のホテルに行き（第四卷二四章一四九頁）、その後も情事を重ねる。財前、金井助教授、佃講師が学術会議会員選挙などの打合せをここで行い（第四卷第二七章三九五頁）、佃の実家が西宮の大きな外科病院で、父親は西宮医師会の実力者であることが述べられる。

料亭 雪亭（東京都中央区）／料亭 芝の家（東京都中央区）

「発癌研究の班会議」で東都大学医学部第二外科の船尾教授の発表後、東都大学系を中心とした三十人ほどの研究グループメンバーが懇親会を「雪亭」で開く（第一卷三章一八〇頁）。船尾は東の十一歳年下で、東の兄弟子にあたる瀬川教授の門下である（同前一七七頁）。この日、東は六十二歳とされるので（同前一八五頁）、船尾は四十九歳となる。財前が教授になったのは四十四歳であり、船尾と年齢が隔たっているわけではない。船尾の東都大学内や政府関係機関での立ち回りの要領の良さも想像させる。

「雪亭」の会場は十五畳と十畳の座敷で、床の間の前に班長の船尾が座り、東はその横に招かれた。横浜大学、名古屋大学、群馬大学などの教授が参加する。製薬会社の協賛を得た宴席であるらしく「食卓の上には、関西風の贅沢な料理が並び、お銚子とビールがどんどん運

ばれていた」(同前一一二頁)。

この会合の後、東は後任教授候補の推薦を依頼するため、船尾が指定した「浜町の芝の家」に移る(同前一一五頁)。「明治一代女」で知られる浜町は、隅田川に面して付近には芳町の花街があり、戦後も「待合」の並ぶ料亭街であった。

料亭 京美野 (京都市中京区)

洛北大学で開かれた日本癌学会総会の二日目の後、教授選挙の候補の金沢大学教授の菊川昇と船尾を東が誘う。

東の行きつけである鴨川べりの『京美野』の座敷へ上ると、川沿いの部屋がしつらえられていた。鴨川の浅い細流^{せいらぎ}が、ひたひたと音をたてて流れ、真向かいには大文字山が、藍色のなだらかな稜線を引いて、ほの暗い夕闇の中に溶け込みかけ、大文字に連なる東山の峰々も、かすかな明るみを空に残して、山裾は墨色に昏れかけていた。(第一巻六章三五〇頁)

大文字山が正面に見えるのは、三条通りよりも北の高瀬川沿い、それも御池通り以北かもしれない。御池通りは、戦時下に家屋の強制疎開で拡張され、三条通り付近よりも静かな環境に思われる。時代は戦前だが「ぼんち」で主人公が用いる料亭「京富」とも、鴨川と大文字山との位置関係が重なる。

鴨川べりの『京富』は、河内屋の取引先を京都に案内した時には、必ず使うお茶屋であった。金柳からの電話で、車を乗りつけると、女将が玄関まで出迎え、二階の六畳の部屋は、火桶を置いて温められていた。すぐ下を流れている鴨川も、昼なら真向いに見える大文字山も、暗い闇の中へ塗りつぶされ、川水の音だけが、ひたひたと耳を撫でた。(『ぼんち』第三章一五四頁)

この他、国際外科学会に出張中の財前がおもむいたドイツやフランスのカフェやナイトクラブは、当時の風俗を写して興味深く、この欧州旅行自体も、海外に物語を展開して小説を膨らませ、財前の複雑な性格を描写する上で重要である。しかし、戦後の大阪の街をテーマとした本稿の主旨と離れるので註にまとめることにする。⁽³³⁾

八、花森ケイ子の住まいの変遷

「バー・アラジン」のホステスで愛人のケイ子の住まいは、家賃が財前が払い、財前の立場の変化にあわせて三度転居する。最初が大阪市西区の「文化アパート」である。

市電のあみだ池の停留所の前で車を降りて、西に向って一丁ほど歩いて行くと、小さな公園がある。公園の中を横断し、南側

の出口を出たところに、三階建て木造モルタルの文化アパートが建っている。小さな文化アパートであったが、公園に面して建っているところが、明るく清潔であった。(第一巻一章三五頁)

あみだ池の停留所は、当時、周防町筋と阿弥陀池通りの交差点に市電とバスの両方が存在した。『京阪神便覧 大阪市区分地図篇』(昭文社発行)によると、西に一丁歩くと新なにわ筋の工事現場で、立ち退き家を壊した道路予定地が広がっていた(図8)。長堀川を渡河する橋は、まだ架橋されていない。逆に東に一丁程行くと南側に、昭和三十五年に埋め立てられた堀江川の跡を利用した公園が記されている。現在、「堀江川跡碑」の建つ「堀江公園」である。里見の公団アパートに行く方向も停留所から逆方向で記しているが(第一巻第三章一一五頁)、ここも実際には本文にある西側ではなく、東側の公園を南側に抜けた南堀江通り附近のアパートをイメージしているのかもしれない。宗右衛門町の「バー・アラジン」は徒歩での通勤圏となる。

問題は木造三階建ての「文化アパート」という言葉である。これが「文化アパートメント」という意味であるならば、大正十五年に日本初の洋式集合住宅として、財団法人文化普及会がヴォーリスの設計で東京都文京区に建設したアパートを連想させる。鉄筋コンクリート、地上五階、地下一階の規模で、ホテルに近い設備であった。もうひとつは、関西特有の集合住宅を意味する「文化住宅」である。多くが木造二階建てで、壁を隔てて建ち並びながらも、台所などを備え、各戸が独立

していた。

財団法人大阪都市協会・大阪市都市住宅史編集委員会編『まちに住まう 大阪都市住宅史』(平凡社、一九八九年)によると、大阪における「アパート」は昭和になって建ちはじめ、典型的な例では、木造で洋風造り、管理人室があり、廊下で各室を結び、便所と洗面は共用、浴室や食堂もあった。電話をかけると管理人室にかかり、「三十一号室を頼みたいのだが」と頼んでケイコにとりつぐ点は、こうした「アパート」と同じである(第一巻第三章一四七頁)。広さは一室三畳から最大十二畳まで。四畳半と六畳が最も多かった。

昭和六年の大阪市社会部報告第一三八号では、最近増えた「アパート」は厳密な意味での「アパート」ではないが、「俸給生活者又は独身者に経済的しかも簡易にある程度の文化生活を供給する目的のもとに」建設されたものとし、戦前大阪では、都心よりも住吉、旭、西成、東淀川など周辺区に多く、昭和十六年の住宅調査では、大阪市内で一六三棟あったという。住吉区万代に昭和六年に建てられた「交楽荘」の新聞記事には、テニスコートも付設したモダンな「アパート」で、女性ピアノストが住んだり、英学塾の女性講師が著述原稿を執筆していることが報じられている。³⁴⁾

財前は、ちらっとあたりへ眼を配ってから、急ぎ足でアパートの中へ入った。各階に小さなテラスがつき、そのテラスを縦に繋いでいる階段を上って行くのであるが、歩く度に靴音が鳴った。

のアパートの階段を軋みをたてぬように足音を忍ばせてケイ子の部屋へ通っていた自分の姿を思い出し、大学内だけではなく、私生活の面においても、以前と異なった華やかな生活が開けていることに快い満足感を覚えた。(第二卷二二章二二頁)

マンションのモデルは、すでに述べた昭和三十三年に造成された日本住宅公団(現・都市再生機構)の「西長堀アパート」である(図8)。東京晴海の「晴海団地高層アパート」とともに、同公団による都市型高層住宅の第一号とされた。当時の新聞記事の見出しから「マンションアパート」の愛称でも知られる。⁽³⁷⁾十階に住んでいた石濱恒夫は『大阪詩情 住吉日記・ミナミわが街』の「西長堀文化人街道」で、六階が司馬遼太郎、七階に作曲家の大野正雄、同じ十階に森光子が住み、森の部屋が空いた後に野村克也、さらにその後司馬が移ったとする。「各階にキタやミナミの、クラブやバーのマダム」も多かったとし、ケイ子のイメージと重なる。

エレベーターが八階で止まると、ケイ子の部屋は、そこから五部屋先の南向きの角部屋であった。軽くブザーを押すと、内側から把手が廻り、ケイ子の顔が覗いた。

教授選の軍資金からうまく都合し、それで権利金を支払った部屋であった。十畳のリビング・ルームと八畳の寝室、それに台所、バス、トイレット付きという間取りは、さして広いものではなかつ

たが、冷暖房がきくことと、心齋橋まで徒歩で十分とかからぬ大阪の中心地でありながら、前に長堀川が流れ、ここが街中かと思われるほどの閑静な場所であることが、好都合であった。それに、部屋の調度が、贅沢にしつらえられていることも、財前の気持ち満足させていた。(同前)

冷暖房へのこだわりがここでも見られる。ケイ子は「静かなのが何よりやし、アラジンへも便利がいいわ、でも、一番有難いのは、何といても、ここから見える夜の眺めやわ」としてレースのカーテンをあける。

八階建ての建物の真下に、長堀川が黒く光りながら流れ、流れの両側に、赤、青、黄、緑など無数の夜の大阪の灯りが、饒舌な光を燦かせていた。(同前二二三頁)

現実の「西長堀アパート」は長堀川の南側にあり、南向きの角部屋で室内から眼下に長堀川が見える部屋は少ないと思うが(図9)、財前も「僕も、ここからの眺めが気に入って、この部屋にきめたんだ」とし、「ここからこうして、下界を見下ろして、まるで天下をとったみたいないい気持がするじゃないか」と誇らしく語る。

しかし、裁判が始まると「こうしてケイ子のアパートにいる時すらも、被告の座に坐らされている重苦しい圧迫感が財前につきまとった」

(第三卷一九章一六八頁) となり、この風景は財前の心理にも微妙な影を落とすことになる。

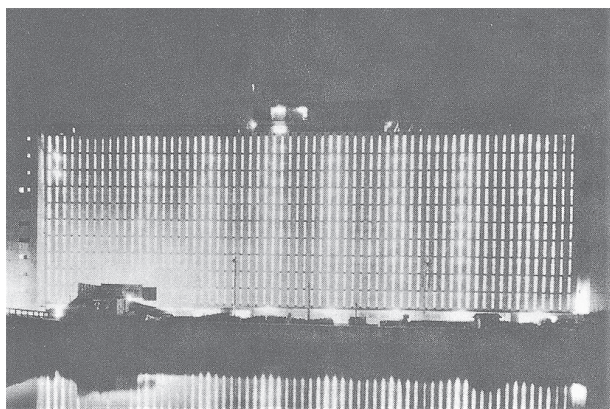
財前は独りケイ子の部屋の窓際に坐り、窓の下を流れる長堀川を眺めながら、明日からの証人尋問が始まる裁判のことを考えると、雑多な思いが^{ひだめ}犇めくように胸を襲った。(第三卷一九章一六八頁)

何時の間に昏れ落ちたのか、さつきまで窓の下に見えていた長堀川の川面が、暗い夕闇の中に吸い込まれ、川沿いの建物に灯りがつきはじめていた。(同前一七三頁)

長堀川は、東横堀川から末吉橋で分岐し、長堀橋、心斎橋、四つ橋(炭屋橋、吉野橋)などを通過して、木津川に合流していた。四つ橋の下流を西長堀川と呼び、昭和三十五年(一九六〇)に四つ橋より上流、昭和四十二年(一九六七)から西長堀川が埋め立てられ、昭和四十六年(一九七一)に工事が完了した。里見の公団住宅近くの中央大通りや新なにわ筋の建設、長堀川の埋め立てなど、万国博覧会を意識したダイナミックな都市改造の一環である。

そして物語後半、ケイ子は帝塚山の新築マンションに移る。

財前が教授になった直後に移った大阪の長堀川沿いのマンションから、今年の初め、さらに帝塚山に出来た新築のマンションに



(図9)「西長堀アパート」の夜景。灯りが西長堀川に映っている。『まちに住もう 大阪都市住宅史』より

移ったのだった。ケイ子は、心斎橋に近い長堀川のマンションの方が、バー・アラジンに近くて便利でいいと云ったが、財前の方が、市内は何かと眼につきやすいからと、大阪の南郊外に近い閑静な帝塚山を選んだのだった。(第四卷二十三章五九頁)

帝塚山四丁目の停留所を右へ折れ、五階建てのマンションの前に車を停めると、財前はすうっとエレベーターに乗り、五階で降りた。人眼を憚るようにケイ子の部屋の扉をノックしたが(後略、同前六〇頁)

マンションは、阪堺上町線の帝塚山四丁目駅で下車した現在の住吉区帝塚山中四丁目付近にあり、帝塚山学院がすぐ側にある文教地区である。もともと大阪府住吉村であったこの地域が、大阪市に編入されて住吉区になるのは、大正十四年である。高級住宅地として発展したのは、南海の高野線や阪堺線の開通に加

えて、戦前から帝塚山学院の開学や、大阪府女子専門学校（後の大阪女子大学、大阪府立大学に統合）の移転、大阪大学の前身である旧制大阪高等学校、大阪府立住吉中学校などが開設され、有数の文教地区になったことによる。先に述べた万代の「交楽荘」の住民も、教育関係者や大阪府女子専門学校の学生である。

『帝塚山風物詩』（垂水書房、一九六五年）で庄野英二（一九一五～一九九三）は、少年時代の帝塚山は「松林と野原の中の高級住宅街」で「よその人は別荘地帯といていた」と回想する。大阪市への編入前後の時期だろう。また同書で庄野は、少年時代の同級生の思い出を語り、帝塚山界隈の豪邸や知識人の住まいに触れている。ケイ子の部屋の様子は、

十二畳程のリヴィング・ルームに置かれている北欧風のチーク材のテーブルも、飾り窓も、木部を生かした安楽椅子^{アール・デコ}も、すべて二ヶ月前に、財前が買い整えたばかりのものであった。（同前）

と記され、同じチーク材でも芦屋川の東邸の「英国風のどっしりしたチーク材の飾り棚と食器棚」と比べ、「北欧風のチーク材のテーブル」であるのが目を引く。「北欧風」は、フィンランドの建築家アルヴァ・アアルト（一八九八～一九七六）の家具を連想させ、人間味のあるモダンでシンプリなデザインをイメージさせる。

右の文章につづけて「国立大学教授としての財前の給料は十万四千

円であったが、他に特診料二、三万、手術の時は別に五万から十万の謝礼が届けられ、そうした収入が月額で五、六十万は下らなかったから、ケイ子にも月々、十万ぐらいいことはしてやれた」（同前）として経済的な話になるが、北欧風の家具を財前自ら「買い整えた」ことに、東邸のような権威の象徴としてや、北堀江で「天下をとった」気分とは異なる、プライベートな秘密の空間で癒やされることを願う心情が映し出される。

帝塚山のマンションには、「中小企業の塗料会社の社長⁽³⁸⁾」（第四章二七章三三〇頁）である安田太一を手術した後、安田が佐々木庸平に似ていることに動揺した時（同前三五五頁）と、学術会議会員当選の祝いと裁判の鑑定人調べの打合せを済ました後に訪れている（第五章三三章二〇四頁）。医学知識のあるケイ子の目には、財前が体調を崩し始めていることが分かった。

九、会館とホール、ホテル

R会館（大阪市北区中之島）

東貞蔵が佐枝子から「菅典子ピアノ・リサイタル」に誘われて大阪R会館にむかう。菅典子は東佐枝子が女学校時代に師事していたピアノニストである。第一回目の教授選考会の日で、今津から打ち合わせをしたいと電話の申し出があり、リサイタルの前に会館の中二階のラウ

ンジを指定した。⁽³⁹⁾

浪速大学からR会館までは、徒歩で十五分程の距離であった。

東は、川沿いの道を歩いて、R会館の扉を押した。^ド

今津を誘って、中二階になっているラウンジへ上って行った。淡い間接照明に照らされたラウンジに、北欧風の家具とフロア・スタンドが置かれ、寛いで話している人影を柔らかく映し出していた。(第一巻七章三九六頁)

コンサート会場は五階で、演奏曲は、第一部がショパンのソナタ、バッハの「イタリア協奏曲」、ベートーベンの「第三番ハ短調」であった。ショパンのソナタは「第二番変ロ短調」か「第三番ロ短調」だろうが、どちらも演奏時間約二十五分、バッハの「イタリア協奏曲」は一、二、三分、ベートーベンのソナタは二十数分で、第一部は七〇分ほどである。里見も患者に招待券をもらい、休憩中に東と出会って食事を誘われて、第二部の「現代音楽の演奏」を聴かずに九階のレストラに席を移す。

九階のスカイ・ルームの中は、食事の時間を過ぎているせいか、ひっそりとしていた。東は、窓際のテーブルを取り、ボーイにメニューを注文すると、窓の外へ眼を向けた。真下にビルの灯りやネオン・サインを映し出した堂島川が、きらきらと光の帯を彩り

ながら流れ、昼間の喧噪が嘘のような静けさが、ビルの谷間を埋めていた。(同前四〇四頁)

堂島川沿いで九階以上の高さがあり、リサイタルが開ける建物には、昭和三十三年(一九五八)に開業した新朝日ビル(図10、北区中之島二丁目、現・中之島フェスティバルタワー・ウエスト)⁽⁴⁰⁾がある。地上十四階、地下二階で、低層階に本格的なコンサートホールである「フェスティバルホール」が入り、南側壁面には、建島寛造ら行動美術協会会員による陶板レリーフ『牧神、音楽を楽しむの図』が設置された。開館時から毎年「大阪国際フェスティバル」が開かれ、「白い巨塔」連載開始の昭和三十八年の第六回には、ピエール・モントゥーとロンドン交響楽団が来日している。

ヘルベルト・フォン・カラヤンも昭和四十一年(一九六六)「大阪国際フェスティバル」のために来日し、四月二十二日、R・シユトラウス「ドン・ファン」とブラームスの「交響曲第一番」を演奏した。⁽⁴¹⁾「サンデー毎日」五月一号は、指揮をするカラヤンを表紙に特集記事「カラヤン指揮『続・白い巨塔』」を組んだ。来日は「続・白い巨塔」の連載がはじまる前年だったが、物語後半で佐枝子は「カラヤンのベルリン・フィルハーモニーを一緒に聴くという形」で個人病院の長男と見合いをさせられている(第四巻二七章三六一頁)。

新朝日ビルには、竣工と同時に朝日放送本社・ラジオ部門も入居し、公開放送用の「ABCホール」が設けられた。同ホールは、昭和

四十一年（一九六六）に朝日放送が大淀南二丁目（当時・大淀区大淀町）に移転後、「SABホール」と改名して「フェスティバルホール」の小ホールの位置づけになり、平成元年に「リサイタルホール」に改称した。

新朝日ビル上階には大阪グランドホテルが開業し、客室四〇〇室、収容人数六〇〇人、食堂には、ダイニングルーム（エンパイヤールーム）、グリル・パイン、グランドスカイ（スモーガスボード）、和食堂、ソーダファウンテンがあった。^⑧ 東たちが食事をした九階の「スカイルーム」は、大阪グランドホテルの食堂をイメージしているのだろう。

文中で関心を引くのが、東や里見がリサイタルの第二部「現代音楽の演奏」を聴くのをやめて食事に行っていることである。「白い巨塔」の連載が始まった昭和三十八年の十二月に、第一回「大阪の秋」国際現代音楽祭^⑨が開催されている。第一夜〈管弦楽〉は、大阪フィルハーモニー交響楽団を外山雄三が指揮し、クシエネツク、ペンデレツキ、ルストラフスキ、ウェーベルン、コダーイや松村禎三の曲が演奏され、第二夜〈テープ音楽〉はナショナル電化センターで、マデルナ、ベリオ、ブッスール、諸井誠、高橋悠治、一柳慧の作品が発表されて、松下真一と上浪渡が講演している。

菅典子が第二部で演奏した現代曲は、第一部のプログラムから想像すれば、ラヴェルやストラビンスキー、バルトークなどが現実的だが、「現代音楽」に山崎は抵抗感があったのだろうか。「大阪の秋」国際現代音楽祭^⑨は、昭和五十二年（一九七七）の第一五回まで続いた。



（図10）新朝日ビル、昭和33年（1958）。橋爪節也監修『写真アルバム 大阪市の昭和』樹林舎、2018年より

K会館（大阪市北区中之島）

「堂島川沿いのK会館の三階にある喫茶室」でケイ子と落ち合い、財前はタクシーで木津川の河口に行く（第一巻七章四一七頁）。また、「堂島川沿いのK会館グリの奥まったテーブル」で財前と柳原が「遅い昼食をとる」にし、「舌平目のムニエル」にビールを吞んで、裁判の証人出廷の打合せをする（第三巻十九章二四三頁）。

「K会館」のモデルだが、堂島川沿いで「会館」の付く施設に「朝日会館」（図11）がある。大正十五年、朝日新聞社が中之島に、大阪



(図11) 左から「朝日ビルディング」「朝日会館」「新大阪ホテル」

に少ない快適な舞台や展覧会場の開設を目的に建設した。地上六階・地下一階で、黒い外壁に金色の窓枠、装飾は総て埃及式^{エジプト}である。四階の「公演場」の円柱はパピルスをかたどり、ヒエログリフや女神ハトホルなどのレリーフが舞台の周囲を飾る。演劇や映画鑑賞会、ハイフェッツなどのコンサートが開かれたほか、三階の「展覧場」は、二

科展や国画創作協会展、全関西洋画展、佐伯祐三遺作展などの美術展会場となった。フェスティバルホールの誕生後は、リバイバル映画館となり、「白い巨塔」連載直前の昭和三十七年に閉館している。

「会館」と呼ばれる建物を、音楽や演劇専用ホールとせずに、「綿業会館」「電気会館」「毎日会館」のように企業や同業者組合の総合的な集会所や事務所ビルと解釈すれば、「K会館グリル」

の「舌平目のムニエル」などのメニューは、「朝日会館」東隣の「朝日ビルディング」(現・中之島フェスティバルタワー・ウエスト)のレストラン「アラスカ」(現在、中之島フェスティバルタワー・イーストに移転)をイメージしたものかもしれない。「K会館の三階にある喫茶室」も、「K会館グリル」とは別にあるもので、建物に入居する事務所関係者や一般通行人が利用できる施設として設けられている印象である。

「K会館」ではないが、里見と佐枝子が浪速大学の病院を出て昼食をとったのも堂島川沿いである。

堂島川の流れに沿った道をゆつくりと歩き出した。五月初旬の明るい陽の光が川面に光の矢のように燦き、川岸の並木が緑の葉を艶やかに茂らせていた。

川風に吹かれながら、四、五丁歩き、川べりのコテエジ風のレストランの前まで来ると、里見は扉^{ドア}を押して中へ入り、川に面した窓際に席をとった。(第二巻一二章二四二頁)

「スープと海老のグラタン」を二人は注文する。再度二人は「川沿いのレストラン」に行き(第二巻一三章三〇七頁)、「白い巨塔」が水都大阪の川沿いの物語であることを、ここでも印象づける。山崎は昭和三十三年の「東京新聞」のインタビューで「素材的にいえば、やはり大阪の空と川と人間を、今後にかきつづけてゆくつもり」とし、川

へのこだわりを語っている⁽⁴⁾。続けてそれは「単に大阪に固執するという意味ではなく、私にとって、自分の生まれ、育ったところから、ものを感じ、見詰めて行くことが、よりの確な人間把握の方法だという意味あい」で、「その人間把握は、市民としての実生活者の意識で、今日の人間の生活や思考をとらえてゆくべきだと思う」とした。

他に当時の堂島や中之島界隈でコンサートが可能なホールは、川に面していないが、桜橋交差点の近くに、昭和二十七年（一九五二）に「サンケイホール」（現サンケイホールブリーゼ）が本格的コンサートホールとして開館し、昭和三十一年（一九五六）に毎日大阪会館北館十一階に放送用の「毎日文化ホール」、昭和三十三年に、毎日大阪会館南館一階に「毎日ホール」が出来て演劇やコンサートに用いられた。

S会館（大阪市中央区本町）

「本町のS会館のフラワールーム」で浪速大学医学部の教授夫人達の「くれない会」の例会が開かれている（第二巻二二章二一六頁）。教授となった財前の夫人杏子のデビューとなる会で、「太い男のような声」の「派手な舞台衣裳のような着物を着た鵜飼医学部長夫人」を中心に教授夫人たちが、学内での夫の立場に応じた序列で着席する。

「S会館」のイメージは、山崎豊子の母校である旧制相愛高等女学校（現・相愛中学校・高等学校）の相愛学園を踏まえたものかもしれない。相愛学園は、明治二十一年（一八八八）に大阪市本町に創立された相愛女学校がそのはじまりである。杏子が「阪神女子大」の出身

と紹介されることや夫人たちの会合という性格も、女学校を源流とする相愛学園のイメージを喚起させるかもしれない。「くれない会」は昼食会であり、ボーイがスープを配膳していく。そこにはすぐ近くにあった「ガスビル食堂」（中央区平野町）も意識されているとも考えられる。

新大阪ホテル（大阪市北区中之島）

昭和十年、海外旅客を迎えるホテル不足から市と財界をあげて中之島に建設したのが「新大阪ホテル」（現・リーガロイヤルホテル）である。「白い巨塔」では、実名のまま登場する。

土佐堀川、堂島川の両方に面し、地上八階地下二階の「豪壮なベネチアンゴシック式の日本最大のホテル建築」で、武田五一が実施設計に関与し、意匠は長谷部竹腰建築事務所が担当した。戦前のパンフレット（図12）は、世界に誇る『大大阪』の、躍進都市にふさわしい「宏壮無比」で「万般の新設備」を備えたホテルであることを謳い、冷暖房完備や、伝票を送る転送管、自動車と呼ぶオートコール、客室を管理するデノーテイングシステムなどを紹介する。昭和四十年（一九六五）に、現在のリーガロイヤルホテルとなる「大阪ロイヤルホテル」が開業するが、「新大阪ホテル」は、昭和四十八年（一九七三）まで創設時の建物で営業していた。

「バー・シロー」で東と鵜飼が会った原文部次官も新大阪ホテルに宿泊し（第一巻四章二三九頁）、滝村恭輔名誉教授の「喜寿の会」も

こいで開かれた。

新大阪ホテルの三階大広間には、浪速大学名誉教授、滝村恭輔の喜寿の会を祝う各界の名士たちが、次々と集まっていた。大阪近県の国立大学の学長、医学部長はもちろん、知事、市長、商工会議所会頭をはじめ、有名財界人、大阪選出の衆、参院議員などが、殆ど顔を見せている。(第一巻六章三六四頁)

財前の「学術会議会員当選の祝賀パーティー」が開かれるのも「新大阪ホテル」であり、滝村の「喜寿の会」と同じ宴会場である。

浪速大学の教授たちをはじめ、系列大学の学長、教授、系列病院の院長、医師会の役員たちが顔を揃え、平和製薬の社長をはじめ、有名な財界人、政界人の顔も見えている。(第五巻三二章二三〇頁)

「カクテル・パーティー」のため定まった席次はないが二百人ほどが参加し、「金屏風を背にしたメイン・テーブルには滝村名誉教授をはじめ、各大学の学長や医学界の長老、政財界の知名人」(同前二三一頁)が席を占めた。半ば伝説化した名誉教授の滝村が自宅以外で姿を見せるのは、これら二回のパーティーである。

華やかな席で財前は「四十四歳で教授、四十六歳で学術会議会員、

五十歳で学士院賞、五十五歳で学士院会員、六十歳で文化勲章という自分自身で引いた人生の図面が、ほぼ計画通り運んで行きそうな心の酔い」を覚える(同前三六頁)。そして「ふとハイデルベルグのネッカー河に面したホテルで開かれた国際外科学会のレセプションの様子」を想い出し、

華麗なシャンデリアの光が、ネッカー河を光の海にした美しい光景が眼にうかんだ。窓の外へ眼を遣ると、夜の堂島川がホテルの灯りを映し、きらきらと小波だつように流れている。(第五巻三二章二三五頁)



(図12) 戦前の海外向け「新大阪ホテルパンフレット」 著者蔵

とする。この描写も「白い巨塔」が、都市における川の流れと同調する物語であることを強調している。

六甲山ホテル（神戸市灘区）

「近畿労災病院」の院長就任を弟の池沢正憲代議士に依頼するため、日東レーヨンの池沢社長夫妻と東夫妻が会う。池沢は六甲山に山荘を持ち、静養中であつた。

日曜日の夜のせい、六甲山ホテルのダイニング・ルームは、晚餐客で賑わっていた。ダイニング・ルームの窓の下には黯い影になった山並が続き、山裾に帯のように細長く広がった神戸の街の灯が、寶石をちりばめたような美しさで輝いていた。沖には外国船が入っているのか、眩いばかりの光が真つ暗な海の一点を照らしだしていた。（第一巻第六章二九一頁）

「六甲山ホテル」は、昭和四年（一九二九）、宝塚ホテルの分館として開業し、古塚正治設計の建物は、国の近代化産業遺産に認定されている。「六甲山ホテル」が阪急の系統に属したのに対して、昭和九年（一九三四）、阪神の系統の「六甲オリエンタルホテル」が開業する。

先述したように、山崎の秘書をつとめた野上孝子によると、「女系家族」連載中、執筆のため山崎は、「六甲オリエンタルホテル」に滞在し、「白い巨塔」執筆直前には、六甲山上に山荘を新築する。野上

はこの山荘について「堅牢にして趣味のいい造りだった。特に居間にしつらえた暖炉のデザインが、眼をひいた。煙突カバーは漆を塗り重ねた銅板、窯が煉瓦で、そのコントラストが斬新だ」と語り、朝食は、バラソルを広げた庭で、近くのホテルから買ってきたクロワッサンやジャムを並べ、庭の遊歩道のクマザサ刈りも山崎が率先して行ったとする。⁽⁴⁾池沢の山荘のイメージや「六甲山ホテル」での東との食事の場面にも、こうした実体験が反映されているのだろう。

財前は、物語後半で「ナイトクラブ・リドー」から自動車で加奈子と六甲山へ向かうが、ここは「六甲山山上のホテル」としてホテル名を曖昧にしている。

シーズンオフのホテルは森閑として人気がなく、部屋へ案内され、ベランダから外を見ると、つい今まで出ていた霧が風に吹かれるような早さで消え、霧の去ったあとに、神戸の街の灯が一望のもとに見下ろせた。山裾から神戸港の海岸沿いに、赤、青、緑などのさまざまな色と輝きを持った灯りが列なり、街全体がステンド・グラスのように燦き、その灯りの向うに真つ暗な海が広がり、遠くの沖に明るい灯をつけた船が一艘、不夜城のように浮かんでいる。（第四巻二四章一五三頁）

神戸港の夜景が再び強調され、加奈子は「宝石箱をひっくり返したみたいな灯、ルビー、サファイヤ、エメラルド——」と溜息をつくよ

うに窓の外を眺めた。

舞子ヴィラ（神戸市垂水区）

財前は手術の後、ケイ子と須磨海岸にドライブし、淡路島を対岸にのぞむ風光明媚な「舞子ヴィラ」の庭園で夕食をとる。「舞子ヴィラ」は「元有栖川宮別邸」であった。

車が玉砂利をはじいて舞子ヴィラの玄関に停まると、財前より先に降りたったケイ子は、瓦葺二階建て、総檜造りの重々しい構えに眼を瞠った。

「どうだ、面白いだろう、木曾の御料林から精選した檜ばかりで造営されたということだが、この玄関はまるで神宮の社殿みたいだろう、だが、中がまた見物なんだよ。」

財前は先に立つて中へ入って行った。三棟に別れた宏壮な建物の中は、襖や障子はずされ、畳の代りに絨毯が敷き詰められているだけで、あとは殆ど昔のままの形で使われていた。元御座所であった広い部屋は、ロビーに使われ、正面の間半の大床と床脇の天袋は摺金箔の昔のままの面影を残し、その前の安楽椅子とテーブルがどしりと置かれて、御座所を取り巻く鞘の間、広々とした廊下にな用いられ、チークの揺り椅子が置かれていた。（第二卷十三章三三一頁）

実際の「舞子ビラ」は、明治二十七年（一八九四）に有栖川宮熾仁親王が別邸を建設し、大正六年（一九一七）、住友家の迎賓館となり、戦後はGHQの接収、ホテルトウキョウ、オリエンタルホテルの経営を経て、昭和四十一年に神戸市の所有となった。「白い巨塔」執筆時は「オリエンタルホテル舞子ビラ」である。

阪神間には他に、財前が加奈子と情事を重ねる西宮市浜甲子園のホテルがある（第四卷第二十七章四〇一頁）。付近では、昭和五年（一九三〇）に、フランク・ロイド・ライトの弟子である遠藤新（一八九九～一九五一）の設計した甲子園ホテルが有名だが、昭和十九年に海軍病院、戦後は米軍に接収され、昭和四十年に武庫川学院が譲り受けるまで放置されていた。「白い巨塔」のホテルには該当せず、窓の外に絶えず波の音がするという小説の設定とも異なる。現在、旧・甲子園ホテルは武庫川女子大学に属している。^④

十、佐々木商店と共販所

噴門癌で死亡する佐々木庸平だが、船場の店は活気にあふれていた。

佐々木商店の朝は早い。六時になると、もう床を離れて、店の者より早く表戸を開け、⑤の暖簾を表口に掲げるのが佐々木庸平の日課であった。資本金九百万円の株式会社、佐々木商店に違い

なかったが、実態は、持株の全部を一族で占めている個人経営の繊維卸商店であった。(第二卷一三章二六〇頁)

二十数名の住み込み店員がいるが、労働基準法が厳しくなつて昔のように七時開店ではなく、庸平が準備をして八時半に開店した。

十時を過ぎたばかりの店は、晒、浴衣、肌着、既製服などの繊維製品が陳列棚一杯に積み上げられ、仕入客を相手に大算盤で値差しをする者、受注伝票を勘定場に廻して総計をメめる者、地方送りの荷を包装する者など、息つく間もないほどの忙しさに活気付いている。(同前二九一頁)

第一内科の外來で里見が確認したカルテによると、診察時に庸平は五十四歳で、既往症として三十三歳のときの肺結核がある(第二卷二二章二三一頁)。昭和三十九年(一九六四)が没年なので、明治四十三年(一九一〇)に生まれ、肺結核は昭和十八年(一九四三)に罹患したことがわかる。妻のよし江は「船場の綿布問屋に丁稚奉公に入り、二十七歳で暖簾分けして貰うて、場末の間口半間の小店から、船場の繊維問屋筋の真ん中へ店を構えるまでは、人さまには云えん苦勞の連続で」とし(第五卷三三章二三七頁)、二十七歳の昭和七年(一九三二)に独立し、「店の拡張の過勞で胸をやられた」結核は、一年で癒したとする(第二卷一三章二六三頁)。

帰国した財前に突きつけられた朝刊記事「浪速大学財前教授訴えらるる／誤診よる死を追及」では、佐々木庸平は「大阪市東区唐物町九一の繊維卸業」で、妻の佐々木よし江(四八歳)が、関口仁弁護士を代理人に、七月二十一日に大阪地方裁判所に八百万円の損害賠償と慰謝料請求の訴えをおこしたとする。庸平は五月二十一日、国立浪速大学附属病院に入院し、五月二十九日に手術が行われたが、国際外科学会出席の準備の多忙さを理由に、財前は術後一度も診察せず、庸平は六月二十日午後死亡した。財前の帰国は七月二十三日である(第三卷一七章一三八頁)。

記事に記された唐物町は船場の中央に位置し、南本町と北久太郎町の間の東西の通りで一丁目から五丁目まであった。「中央大通り」の建設で、道路用地となつた唐物町南部、北久太郎町北部の家屋は取り壊され、昭和四十五年(一九七〇)に、立ち退きとなつた店舗の移転先である「船場センタービル」がオープンする。「唐物町九一」という番地は架空だが、店は井池にあったとされているので、井池の通りと唐物町が交差する唐物町三丁目と四丁目の境界付近に位置した(図13)。⁽³⁰⁾庸平が死なずに商店が続いていたとして、唐物町の通りの南側ならば立ち退きとなり、北側ならば「船場センタービル」と向き合い、現在の南本町三丁目に町名変更されている。

佐々木商店の規模と経済状態も克明である。入院前の庸平は番頭に、留守中「月商い一千五百万、荒利益一割、純益五分という線」は維持して欲しいと命じ(第二卷一三章二九二頁)、裁判での請求額も、



(図13) 当時の大阪市東区唐物町付近。『京阪神便覧 大阪市区分地図篇』(昭和35年、昭文社発行)を参考に制作。○印が佐々木商店の位置(推定)、楕円が柳原が降りた本町二丁目の交差点。

よし江の「死亡時の夫の収入は、社長としての月給が二十一万円、賞与年二回二百十万円、年額総収入は四百六十二万円ぐらい」(第三卷一七章一二七頁、同じ数字は第四卷二六章四〇八頁にもあり)をもとに関口弁護士が試算し、庸平が生存していたとして生涯に得る総額は三千七百五十五万、精神的苦痛の慰謝料を加えると損害は三千九百五十五万円とする。大学教授にこの額の支払い能力はないと思われることから、慰謝料ともども八百万円として訴えた。

控訴審でも、佐々木商店は「従業員三、四十人の中小企業」で「店の敷地は間口六間、奥行七間で四十二坪」、土地は借地で「地上権坪五十万とみて、約二千万」、建物は古く「三百万」ぐらいの評価と、よし江が証言する(第四卷二八章四二〇頁)。

そして、よし江に同情する泉佐野の「元売(大手機屋)の主である大村伝助」の発案で、佐々木商店の氏神である坐摩神社の社務所で債権者会議が開かれる。坐摩神社(大阪市中央区久太郎町)は、宮所守護の神々とされる坐摩大神を祭った社で、大川に面して「渡辺津」とも呼ばれた中央区石町付近に創建されたとされ、秀吉の大坂築城で現在地に遷座した。

「小料理屋の座敷で債権者会議を開けば酒が入り、つい激しい鬱憤や常識はずれの言動が出るが、神社の社務所なら費用もかららず、鳥居をくぐり、最初から神社の法被を着た下足番に下足をとられたら、入った時から行儀がよくなるから」(第五卷三〇章一〇一頁)というのが、大村が債権者会議を神社で開くことを提案した理由である。債務総額を、よし江が説明する。

「債権者の方々は、全部で十八軒で、債務総額は四千八百万円でおます、一方、手前どもに残っております財産は、在庫品が売価格で約二百万、未収の売掛が百七十万、銀行手形割引のために預けてる定期が二百万で、総額五百七十万ほどあり、四百八十万から五百七十万を差し引いた残り四千二百三十万円が、佐々木商店

の債務になるのでおます」(同前一〇四頁)

返済の仕方にも触れ、

「店を処分致しまして、というても、借地だですので、地上権坪五十万円とみて、四十二坪で二百萬、建物三萬として合計二千四百萬という額になり、債務高の約五割になるわけですけど、申しわけないことには、店舗の半分を既に下着屋に貸してしまつてますので、半分だけを処分するわけには行かず、下着屋に出で貰わんことには、店の処分がでん現状でおます」(中略)

「何とか、四千二百三十萬三割の千二百六十九萬は、捻出してご返済せんといかんと思つとります」(同前一〇五頁)

裁判での尋問でもよし江は、

「既製品や肌着のような二次製品が売価価格で二百萬、未収の売掛が百七十萬、銀行手形割引のための預金が二百萬で総額五百七十萬が私どもの手もとに残り、差引き四千二百三十萬が佐々木商店の債務で、十八店の債権者の方に何とか債務の三割はお返しすることになっています。」(同前三二章二三八頁)

とし、「敷地四十二坪、建物三十五坪の店」を売って一千二百六十九

萬を返済するという。倒産した店から、よし江と息子の庸一が去る場面は、

佐々木庸平が生きていた時には、四十数人の店員が、仕入客を相手に大算盤で値差しする者、受注伝票を勘定場に廻して総計をメめる者、地方送りの荷を梱包する者と忙しくたち働き、中堅どころの繊維問屋として商いが賑わっていたのだった。それが佐々木庸平が死亡してから僅か二年半も保たずに倒産の憂目に遭い、大戸の軒下に、ついこの間まで佐の暖簾が真一文字に掲っていた跡が、くつきりと残っている(第五卷三〇章一一一頁)

そして「もとの佐々木商店から八丁程西寄りにある『共販所』と呼ばれる繊維類の共同販売所」に移って一台三萬圓を二台、月六萬圓で借り、大村の一字をとって「村木商店」の名前で広幅綿布、小幅木綿、蒲団地、紺無地、化繊地などの生地ものだけを扱うことになる。「共同販売所」の様子を、柳原は次のように記した。

共販所の前まで来ると、まだ八時を廻ったばかりというのに、五、六十坪のただっ広い建物の中に、自前で一軒の店舗が持てず、机二台乃至三台位の広さに仕切りした店が、両側と真ん中に三列になつてずらりと並び、台の上に商品を堆く積み上げ、その日の日銭商いをする人たちで殺氣だっている。(同前)

この「共同販売所」の場所だが、「亡夫が商いをしていた船場の端くれで、裁判がすむまで商いを続けたいというよし江の執念が、共販所入り」（同前一二三頁）になり、法廷でも「同じ井池筋の端くれ共同販売所」で「キャラコや化繊の危^{あぶなげ}気のない生地ものの現金商い」をし、「主人の位牌一つ、棒杭一本持つてでも、夫の執念がしみついてる船場で商いを続け、この裁判に勝ちたいのでおます」と話している（同三二章二三九頁）、船場のなかに存在し、井池筋であったことが分かる。

しかし、柳原がバス亭の本町二丁目（図13）で降りて「井池筋の端にある共同販売所」へ向かった時は、「三休橋筋を過ぎて半丁程行くと、『共同販売所』という看板が眼についた」（第五巻終章三六六頁）とする。大阪市バスの本町二丁目停留所は、堺筋と本町通りの交差点であり、三休橋筋には本町三丁目の停留所がある。柳原の行程では、佐々木商店のあった井池の唐物町から「共同販売所」は離れていない。「佐々木商店から八丁程西寄り」を現実の地図でトレースすると、船場を出て西区に入ってしまう。八丁程の隔たりは、商いの中心から離れた距離感を強調し、没落した境遇を明瞭に示すためだろう。

倒産後、佐々木家は、「六畳一間と小さな台所だけの手狭さ」だが「安普請ながら新築であるのが取得」の東住吉のアパートに移り、大学を中退した長男の庸一、長女の芳子、高校一年の弟の勉の四人で住む（同前二九一頁）。二審判決は財前敗訴で、二百七十五万円の支払いが命じられた（同前三〇三頁）

十一、柳原弘と亀山君子

物語前半では曖昧だった設定が、後半になって具体性を帯びる例が、柳原とそのアパートである。柳原は五人兄弟の長男で、父は「九州の田舎で郵便局長」をし（第四巻二三章六五頁）、宮崎県の出身で（同二八章四五三頁）、縁談の断りの手紙で名が「柳原弘」であることが分かる（第五巻終章三五九頁）。住まいは「古い上に安普請の木造二階建てのアパート」で天井には「雨漏りが染みて」いる。

六畳一間の部屋は蒲団を敷くと、あとは机、椅子、本棚で一杯になり、本棚に入りきらない本やインスタント・ラーメンの箱が、赫茶けた畳の上にじかに積み上げられ、壁には、くたびれた背広やレイン・コートがハンガーにぶら下り、北向きの陰気な部屋を、さらに陰気くさくしている。（第四巻二三章六三頁）

有給助手になつての給料は二万六千円、アルバイト代一万二千元、合計三万八千円が収入で、アパート家賃六千円、食費一万二千元、年間の学会参加積立金と医局費が八千円、自分の研究費が最低で一ヶ月に一万円かかり（同前六四頁）、生活はきびしかった。

日清食品の「チキンラーメン」が昭和三十三年に発売され、明星食品やサンヨー食品からもインスタントラーメンが発売される。箱が積み上げられているという描写に、安価な常備食としてそれが社会にも

定着したことが分かる。

見合いをした野田華子が来る場面も、「木造モルタル塗二階建ての柳原のアパート」「赤茶けた畳に本棚と机、インスタント・ラーメンの箱が転がっているだけの殺風景な北向きの部屋」(第五卷第三一章一六七頁)と記される。「六畳一間に流し台が付いただけの部屋」であり「二年間住み馴れたアパート」(同終章三五八、三六〇頁)であった。

アパートの所在は、学術会議選挙の票とひきかえに、関西医科大学系列の舞鶴総合病院に左遷された江川達郎にからんで分かる。阿倍野の開業医の息子である江川は(第五卷三三三章二六八頁)、医局の抄読会の記録が控訴審の証拠になることを知らせ、「はしだて号」で夜七時二〇分に大阪駅に到着し、柳原が迎えて「大阪駅からタクシーを拾って、東淀川の柳原のアパートの前」で降りたとする(第五卷三三三章二六九頁)。東淀川区は、大正十四年の大阪市編入後、農村地帯から急速に都市化が進んだ地域で、戦前から「アパート」が多く、⁽⁵²⁾阪急京都線・千里線が通つてはいるが駅から遠い地域もあり、柳原のアパートは市バスが主な交通手段(第五卷三三三章一七二頁)であった。柳原に関して当時の大阪の都市景観を描いた場面では、赴任する江川を見送る場面に大阪駅前の地下街が登場している。

大阪駅の西寄りの地下街には一杯飲屋が密集するように並んでいる。その一軒の五人入ればもう腰掛が一杯になり、鳥を焼く臭いと煙がたち籠めている中で、柳原と舞鶴の病院へ飛ばされるこ

とになった江川が、焼鳥を食べながら、盃を重ねていた。柳原は二、三杯でもう真っ赤になっていたが、見かけによらず酒に強い江川は、盃からコップ酒にかえ(第五卷第二九章四七頁)

昭和三十三年の季刊誌「大阪」は梅田の地下街に触れ、「その殆どが飲食店、ぶらり横丁、各県の名産販売所」であり、入口も二十七カ所あつて迷路のようであると述べるとともに、数年後を目指した地下街の整備拡大を予告する。「ウメチカ」と呼ばれたウメダ地下センター(現・ホワイティ梅田)の開業は「白い巨塔」連載開始の昭和三十八年であり、右の場面は昭和四十年頃に当たる。この後も大阪駅前の地下街は広がり続け、日常生活のなかの迷宮として昭和五十三年の「SFマガジン」五月号に、堀晃の「梅田地下オデッセイ」が掲載された。この後、浪速大学をやめた柳原は、四国の僻村へ医師としておもむくことになる(第五卷終章三六〇頁)。

もう一人の重要な証言者である亀山君子は、もと第一外科の病棟婦長で、物語後半では近畿労災病院に勤務している。近畿労災病院のモデルと思われる関西労災病院がある尼崎市の杜宅に住み、夫の塚口雄吉は三光機械の旋盤工である。佐枝子は、君子が控訴審の証言台に立つことを依頼に阪神電車尼崎駅で下車する。

駅前の煙草屋で聞いて、川沿いの道へ出た途端、佐枝子は額に

かざしていたハンカチーフを鼻先に押し当てた。川とは名ばかりで幅二メートル半ほどの溝川は、近くの工場の廃液が流れ込んでいるらしく、鼻を衝くような悪臭が臭いたち、溝川沿いの舗装のない地道は、ダンプ・カーやトラックが通る度に濛々と、砂埃を舞い上げていく。

川沿いの道を南に二丁ほど歩き、目印の自転車修理店の前の小橋を渡ると、黒く煤けたトタン屋根やブロック塀の小さな町工場が細い道を挟んで聳くように並び、その向うに古ぼけた木造住宅が並んでいた。それが亀山君子の住む三光機械の杜宅のようであつた。(第四卷第二十六章二三三頁)

大阪での煤煙問題は、大正時代からあり、賀川豊彦(一八八八—一九六〇)の小説『空中征服』(改造社、一九二二年)もそれをテーマとし、大正十四年創設の大阪都市協会の「大大阪」でも論じられている。尼崎市も戦前から、地盤沈下・水質汚濁・大気汚染等の公害問題があり、高度成長期には、工場の煤煙と、国道四三号線や高速道路の排気ガスによる大気汚染が深刻な被害を及ぼした⁽⁵⁾。再度、佐枝子が向かったときも、

東佐枝子は、紺のワンピースに白い手袋をはめ、右手に果物籠を下げて、阪神の尼崎駅から川沿いの道を歩いていた。

幅二メートル半ほどの川は、近くの工場から流れ込んで来る廃

液でどす黯い泡をぶくぶくとたて、鼻を衝くような臭気と熱気が蒸せかえっている。

川沿いの道を二丁ほど南に行き、黒く煤けたトタン屋根やブロック塀の小さな町工場が聳くように列んでいる細い道を歩きながら(中略)古ぼけた五軒一棟の端から五軒目が、亀山君子の家であつた(同前二九三・二九四頁)

と辺りの環境が記される。弁護士の国平が訪れたときも、同様の劣悪な環境が、下町の姿として描かれている。

医師会の顧問弁護士である国平は、尼崎の町工場が聳くように建っている溝川沿いの道をゆるゆると車を走らせ、番地を追っていた。

トラックやダンプ・カーの往來の激しい工場街に、冷房付きの高級車は人目につき、木造の住宅から主婦や子供たちの物見高い顔が覗いている。国平は、元浪速大病院の病棟婦長をしていた亀山君子の家を探しているのだつた。川沿いの道を二丁程南へ行き、右へ折れると、やっと三光機械の杜宅を見付けたが、そこからは車が入らない。国平は車を降りると、砂埃を払うように麻のハンカチーフでぱたと衿もとのあたりを払い、菓子箱をさげて、端から五番目の塚口という標札が掲げられている玄關にたつた。(第四卷第二十七章三六七頁)

公害に対して尼崎では、市も調査や条例の制定、企業への指導などの対策を進めたが、昭和四十六年に「尼崎公害患者・家族の会」と「国道四三号線公害対策尼崎連合会」が結成され、昭和五十三年の大阪市西淀川区の公害訴訟につづき、昭和六十三年に尼崎公害訴訟が起こされた。

十二、近畿癌センター

大学に辞表を提出した里見が移ったのが「近畿癌センター」の「第一診察部」で、浪速大学には、週に一度、第一内科助教授の肩書きのまま診察に出向するかたちで在籍している。「近畿癌センター」は登場の最初で次のように記される。

千里ニュータウンの高台に建っている近畿癌センターから、四月中旬の爽やかな陽を浴び、滴るような緑に掩われた広大な丘陵が一望のもとに見渡せた。里見は眩ゆげに眼を細め、ゆっくりと視線を東の方に転じると、そこだけは周囲の景観とは一変し、緑の丘陵が切り崩され、赤土が剥出しになり、十数台のブルドーザーやクレーン車が縦横に動き、整地しているのが見える。大阪で開かれる万国博覧会の会場建設地で、敷地造成が始まっているのだった。(第四卷二三章四八頁)。

「千里ニュータウン」は、昭和三十三年(一九五八)に大阪府が開発を決定して昭和三十五年に開発全体のマスタープランがまとめられ、昭和三十七年から第一期の入居が開始された。万国博の開催が正式に決まったのは、昭和四〇年(一九六五)であり、昭和四十二年(一九六七)三月に会場起工式を開催している。右の記述が含まれる「続・白い巨塔」は、「サンデー毎日」昭和四十二年七月二三日号から始まっているので、万博の会場建設がはじまった時期と矛盾はない。また、

近畿癌センターが癌専門の医療、研究機関として発足したのは、四年前であった。一万五千坪の広い敷地には、五百床のベッドを持つ病院と、研究所が整然と並び、内部の設備もすべて最新の医療機器が取り付けられていた。そしてそれらの設備にも増して、近畿癌センターの特色は、各部門の研究スタッフに、学閥を排して全国から基礎、臨床各部門の優れた若手の研究者が集められていることであつた。(同前四九頁)

とあり、四年前とすると物語のなかで「近畿癌センター」は昭和三十八年(一九六三)頃に発足している。「近畿労災病院」から「近畿癌センター」に向かった佐枝子がタクシーから見たのも次の光景である。

吹田市街のはずれから左に入ると、千里ニュータウンの高低の

変化がついた団地が見え、団地の中央部をぬけて、右に折れると、小高い緑の丘が広がり、その丘の上に、近畿癌センターが白堊^あの清潔な壁面を見せて聳え立っていた。(第四卷二五章一八五頁)

里見が佐枝子と一緒に歩いて駅に向かうときにも、万博の工事現場が眼に入る。

里見は遠い一点に視線を向けた。何時の間にか、台地の端にまで来、そこから夕暮の吹田の街が一望のもとに見渡せたが、里見の視線は東の方の一角に向けられていた。そこだけは周囲の景観と一変し、緑の丘陵が切り崩され、赤土が剥出しになった万国博覧会の敷地になり、十数台のブルドーザーやクレーン車が夕陽を浴び、凄じいエネルギーで縦横に動いている。(同前一八九頁)

高度成長期のピークともなる大阪万博が登場し、この作品が、一九七〇年代から八〇年代にバブルを迎える日本の現代史と密接であることを確認できる。二人は、二八章でも「近畿癌センター」から一緒に帰宅し、駅にまっすぐ向かう道ではない台地の川沿いを歩く。

里見はまっすぐ高台を降りる坂道とは反対の方向へ足を向けた。(略)やがて川沿いの道へ出た。木の間越しに高台に聳えている白堊の近畿癌センターが見え、千里丘のマンモス団地の建物

も見えたが、団地の近くにこんな道があるのかと思われるほど、人影のない道であった。(第四卷二十八章五二〇頁)

「近畿癌センター」は、吹田市藤白台から最近、同市岸部新町に移転した国立循環器病センター(現・国立研究開発法人国立循環器病研究センター)を想起させるが、国立循環器病センター開設は、昭和五十二年(一九七七)であり、「白い巨塔」連載から十年後である。最寄り駅である阪急「北千里駅」や北大阪急行「千里中央駅」に鉄道が通った時期も万博前後である。

また、財前が里見に診察して貰うために近畿癌センターを訪れるときは、

国鉄の千里丘で降り、(略)タクシーには乗らず、近畿癌センターのある高台に向って歩き出した。アパート群が建っている中央の大通り避け、遠廻りになったが、人通りの少ない高台への道をコートの衿をたててゆっくり歩いた。(第五卷三三章三二六頁)

として、国鉄東海道本線「千里丘駅」から歩ける距離に設定されている。万博会場を挟んで、旧・国立循環器病センターとは反対側の位置である。

「サンデー毎日」への連載時に、国立循環器病センターの構想が「千里ニュータウン」建設と絡む形で構想されていたかは不明だが、「白

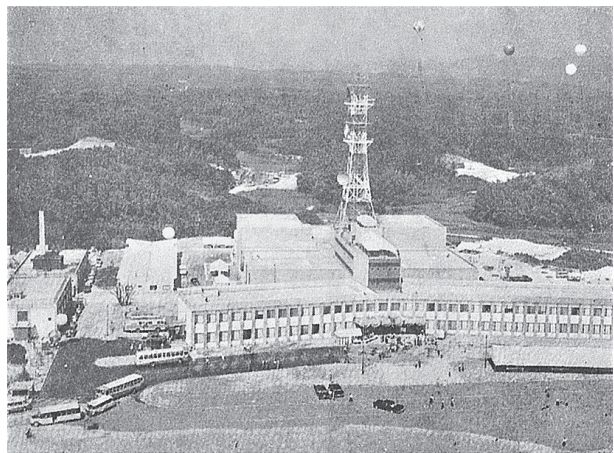
い巨塔」執筆には国立がんセンターの久留勝らが助言しており、人口も増加するニュータウンの中核となる医療機関新設などの可能性も含めて、何らかのヒントが山崎にもたらされていたのかもしれない。

しかし当時の状況から再検討すると、山崎が「近畿癌センター」の設置場所や建物の外観などのモデルとしたのは、かつて在籍した毎日新聞社とも関係が深い「毎日放送千里丘放送センター」ではなかったか。同放送センターは、昭和三十六年（一九六二）に吹田市千里丘北の丘陵に建設された鉄筋コンクリート二階建ての白亜の建物で、事務所棟とスタジオ棟からなり、同年八月に放送を開始した。「木の間越しに高台に聳えている白亜の近畿癌センター」という描写も、放送センター開設時の「毎日放送」の社報（図14）に「白亜の偉容を緑の千里丘陵に現出した」と記されるのと一致し⁽⁵⁵⁾「千里丘駅」から一、二キロの距離で、これを「近畿癌センター」に見立てるならば、病床を抜けた財前が、駅から歩いて行ったことも無理な話ではない。

この時期の地図や航空写真で確認すると、駅に向かう道の反対の丘の下には、この地域に多い溜め池もあったほか、少し離れて山田川も流れている。里見が帰り道で出た川沿いの道のイメージもこの辺りにあるのかもしれない。社報掲載の放送センターの写真の背後の丘陵が万博会場予定地であり、「千里丘放送センター」センターからは、北西の万博工事現場がよく見えただろう。すぐのところにはエキスポランドが建設されている。

なお「白い巨塔」は「近畿癌センター」の東に万博工事現場が望め

ると記すが、モデルとなった施設と異なる方角をあえて記す例は、里見の公団住宅、ケイ子の文化アパート、共同販売所において検証した。方角の違いを理由に「毎日放送千里丘放送センター」がモデルである可能性を否定はできない。



白亜の偉容を誇る（8月31日、毎日新聞社のスワン号より撮影）

千里丘スタジオ竣工

（図14）空から見た毎日放送千里丘放送センター。放送センター開設時の「毎日放送」の社報に掲載された図版。

おわりに―木津川河口の風景

最後に戦後の大阪と財前の闘争的な精神を象徴する空間として、木津川河口の工場地帯に触れておく。物語のなかでこの場所は、三度登

場する。最初が「堂島川沿いのK会館」で、ケイ子と待ち合わせをした後である。

運転手は西に向って車を走らせた。大運橋通りの辺りまで来ると、俄かに家並が疎らになり、高いブロック塀をめぐらした殺風景な工場が多くなって来た。さらに車を走らせ、大船橋を渡ると、そこがもう木津川の河口であった。埋立地らしく赤土がむき出した河岸にコンクリートの堤防が見え、河口を見るためには、堤防に上るしか方法がなかった。(第一巻七章四一八頁)

大運橋通りは、大正区鶴町と南恩加島町を区切る運河に架けられた大運橋を通る東西の通りである。財前はタクシーの運転手に「安治川でも、木津川でも何処でもいい、ともかく、この近くで河口の見えるところだ」と命じているが、K会館に近い安治川河口ではなく、あえて木津川を目指したことが分かる。タクシーは、大運橋通りの交差点を過ぎて南に進み、木津川運河で南恩加島町と区切られた船町へと渡る。

昭和三十五年の『京阪神便覧 大阪市区分地図篇』(昭文社)を見ると、船町には、中山製鋼所や藤永田造船所船町工場、日立造船所築港工場、江戸川化学工業、帝国化工大阪工場、日産化学工業木津川工場、農林省米穀倉庫が記されている。敷地が広大であるのが中山製鋼であり、藤永田、日立の造船所は、地図に各二本の造船用のドックが

記されている。

中山製鋼は、大正八年(一九一九)に尼崎市で亜鉛鉄板製造業として創業され、大正十二年(一九二三)に株式会社となって現在の大正区船町に移転した。昭和十四年(一九三九)に高炉を設置して、製鋼の原料となる鉄鋼をつくる鉄鋼一貫工場となる。製鉄企業が舞台の一つとなる「華麗なる一族」につながる場面かもしれない(図15)。

造船所の前で車を停めると、財前は堤防に向って黙々と歩いた。ケイ子もそれに従った。両側に製鋼所や造船所などの夥しい煙突やクレーンが聳えたち、耳を聳するような音響の中でクレーンの黯い巨大な影が、空を突き刺し、掩うばかりに交錯し、製鋼所の溶鉱炉から吐き出される赤い煙が、焰のようにその一角の空を紅く灼いている。木津川河口の臨海工業地帯の工場群であったが、そこから生れる音響と、黯い巨大なシルエットは、人為を押し、小さな人間の営みなど打ち碎いてしまうような威圧感があった。(同前四一八頁)

藤永田造船所は、元禄二年(一六八九)に堂島船大工町(現・北区堂島)に創業した船大工の兵庫屋が源流とされる。幕末には紀州藩の御座船や、明治初期にはドイツ人技師の指導で民間初の洋式木造外輪汽船を建造する。現在の大阪市住之江区や大正区に工場を設け、日本海軍の指定工場として駆逐艦の建造や、鉄道車両にも携わった。大正



(図15) 中山製鋼と大船橋、2019年 著者撮影

末に船町に造船所を設けた。昭和四十二年（一九六七）に三井造船株式会社に吸収合併されている。根津清太郎と結婚し、谷崎潤一郎と再婚する谷崎松子は、藤永田造船所の専務・森田安松の次女である。

足早にそこを通り過ぎ、河口の小さな砂地にたつ

と、澱んだ水が絶え間なく揺れ動き、思ったより早い流れで河口の岸を洗い、潮風を含んだ初冬の肌寒い夜風が、財前の頬を打った。財前は急に、現在、自分を取り巻いている一切の人間関係が、空ろなものに思えた。（同前）

財前は言う。

「どうだ、いいだろう。大阪にこんなところがあるとは知らな

かっただろう、音響と巨大な機械のシルエットに取り囲まれながら、この河口の一角にだけは、確実な静けさがある——」（同前 四一九頁）

以前からこの場所を知っていた口ぶりだが、「確実な静けさ」という言葉が、小野十三郎の「葦の地方」を思い起こさせる。アナーキズム詩から出発し、戦後は短歌的抒情を否定した小野十三郎（一九〇三〜一九九六）は、詩集『大阪』（赤塚書房、一九三九）や『風景詩抄』（湯川弘文社、一九四三）で、工業地帯の荒廃したイマジネーションを硬質な言葉に結晶させた。桜橋の毎日新聞社の屋上で、学芸部にいた井上靖と小野十三郎、竹中郁、安西冬衛、杉山平一が並んだ写真が、杉山平一『戦後関西詩壇回想』（思潮社、二〇〇三年）の口絵にあり、山崎も小野のことはよく知っていただろう。

小野がモチーフとした空間は、新田開発で誕生し、近代に重化学工業地帯へと変貌していった大阪市の臨海部である。特に「葦の地方」の連作には、日紡、浅野、宇治電などの企業名とともに、戦時中に小野自身が徴用されていた藤永田造船所も登場する。小野は、自分にとっての「葦の地方」は一九六〇年代に終わっていたと語るが、小野の影響力は強く、一九七八年の真栄田義功、村上久雄、犬塚昭夫の『詩集大阪周辺考』（大阪現代詩人会刊）は、大阪の工業地帯をモチーフにとりあげ、所収の犬塚昭夫「見るこの実験―詩集解説をかねて」でも、小野を「私たちが知っている最大の目の詩人」として「見える物

をとおして見えないものを見る方法論を、想像力の実験をとおして確立した」と評している。

小野の詩は視覚的で、静的に凄惨な風景をとらえる。溶鉱炉から放出されるエネルギーや圧倒的な物量感に、悲壮なまでに、自らの才能や能力、権力をイメージとして仮託する財前の視点とは異なるが、どちらも同じ風景に、静謐さと、非人間的で時に暴力的な強大な力の存在を感じており、近代都市大阪の発展が生み出した、特異な文学空間であったと言えるのではないか。

二回目が、裁判において、医学上の過失はなくとも患者との信頼関係がないのは「財前教授の人間性にかかわる問題で、厳しく反省されなければならぬ」と洛北大学唐木名誉教授に指摘されたショックから、ケイ子と訪れたときである。

木津川の河口にひたひたと潮が満ち、思ったより早い流れが河口の岸を洗い、潮風を含んだ初冬の肌寒い風が財前の頬を打った。

(第三卷二〇章三一頁)

財前たちは「人影のない堤防の上」を歩き「青天の霹靂のような一撃」に「財前の胸に、河口の流れのような暗い澱みが揺らいだ。」とする。

薄暮に包まれた堤防の上で、財前とケイ子の黯い影が並んだ。教授選の前にも一度来たことのある堤防であったが、裁判の終

わったあと、どちらからともなく、車で三十分程のこの河口まで来たのだった。(同前)

財前の声に焦りがあった。ケイ子は暫く、河口の向うに見える臨海工業地帯の造船所や製鉄工場などの巨大な煙突の影を見詰めていたが、(同前三二五頁)

この後のケイ子の言葉に財前は「俺の全力を振り搾って、医学的にも、道義的にも、一分の落度もない論理の運びを組み立て、一点の歪も矛盾もない答弁を考える」と言い、「海に繋がる広い河口の外へ挑むような強い視線」を向けている。

三回目が、近畿癌センターで里見から財前の悪い病状を聞いたケイ子が、国鉄の千里丘駅から大阪駅に出て、タクシー一人、木津川の河口に行く場面である。

大阪駅まで電車に乗り、大阪駅からタクシーを拾った。タクシーは、夕方のラッシュ・アワーの駅前をくぐりぬけ、堂島川沿いに西に向かって走った。大運橋の辺りまで来ると、高いブロック塀と煙突がたち並ぶ殺風景な工場地帯になった。さらに車を走らせ、大船橋を渡ると、両側に製鋼所や造船所の夥しい煙突やクレーンが聳えたち、耳を聳するような凄じい音響が鳴り響いて来る。

車を降り、赤土を剥き出した埋立地を歩き、コンクリートの堤防に上ると、河口の波が木津川の岸を洗い、潮風を含んだ風がケ

イ子の衿もとに吹きつけた。(第五卷三三章三七九頁)

な精悍な眼を向けたのだった。(同前)

大阪駅から大正区へは、中之島の南側を流れる土佐堀川沿いの土佐堀通りを抜け、西区川口で南下して境川から大正区に入る道筋もあるが、ケイ子に乗せたタクシーは、あえてドラマが展開する重要な舞台である浪速大学医学部病院や裁判所、会館、ホテルなどが建ち並んだ堂島川沿いの道を選んでいる。また、堂島川は安治川に連なっており、大阪湾に注ぐが、道頓堀川、長堀川などの流れが行き着く先が、木津川の河口である。到着してケイ子は過去に二回、ここに来たときの財前の言葉を思い出し、財前の闘争心がこの凄惨な光景に形象化されていることを再確認する。

一度は教授選の最中で、財前はここ^なに起って、製鉄所の溶鉱炉から吐き出す赤い煙が炎のように夜空を灼き、クレーンが巨大なシルエットを描き出している夜空を見上げ、「国立大学の教授になり得る確率はほぼ二百人に一人、つまり二百分の一の確率だ、その確率を得るためにはあらゆる手段と画策を尽して闘ってみせる」と云い放った。(同前三八〇頁)

一番の判決の前、やはりこの同じ堤防にたつて、もし裁判に負けたらと聞いたケイ子に、「全力を振り捨て、医学的にも道義的にも、一分の歪みも矛盾もない論理の運びを組み立てて、見事に勝訴してみせる」と云い、海に繋がる広い河口の外へ挑むよう

「どんなことがあっても、力の限りを尽くして生きてほしい」とケイ子は願い、河口に潮が満ちるように「もう一度、あの時のように強靱な精神と逞しい体をもった財前に抱かれないという思い」が胸に溢れてくる。

以上「白い巨塔」をテキストに、その舞台となった戦後復興期から高度成長期の大阪の街が、どのように文学空間の中に再構築されているかを検証してきた。物語後半に時間的齟齬に思える部分もある気がするものの、濃密なドラマの進行のみならず、週刊誌連載と物語が時間的に同期した同時代小説であることが読者の強い共感を呼ぶとともに、大阪という大都会固有の個性や街の構造を巧みに設定に取り入れて、戦後復興からオリンピックを経て万博に到るダイナミックな都市の変貌を物語の背景として克明に描写演出したものであった。

山崎豊子の取材能力と骨太の物語の構成員に、あらためて敬服するとともに、医師の倫理と愛憎が蠢く病院と裁判を中心とした人間ドラマを、大阪の歴史や伝統、文化を継承した花街や盛り場、高度成長期の街そのものがリアルな背景として支えていることが確認できる。以上の検証において多少なりとも、文芸作品を題材とする新しい大阪の都市論の可能性を提起できれば幸いである。

最後に執筆に際して貴重な御教示を賜った武庫川女子大学附属総合

ミュージアム館長横川公子、毎日放送岩井正也、大阪商業大学商業史博物館岡村良子の各氏に御礼申し上げます。

注

- (1) 京都は五花街（祇園甲部、先斗町、上七軒、祇園東、宮川町）、東京は六花街（新橋、赤坂、神楽坂、芳町、向島、浅草）。
- (2) 白田喜八郎『大林芳五郎傳』（一九四〇年）。大林組が電子化して、<https://www.obayashico.jp/chronicle/yoshigoroden/t2334.html> で公開される。
- (3) 橋爪節也「大大阪と画家たち第二回 菅楯彦と花街、舞楽、浪速風俗、「やそしま」第十一号 関西・大阪21世紀協会、上方文化芸能運営委員会、二〇一七年。笠井純一、笠井津加佐、沢田伸「北陽演舞場の改築とその背景」昭和4年、7年の内部改修をめぐって」『人間社会環境研究』第三七号、金沢大学大学院人間環境研究科、二〇一九年
- (4) 「北新地ママさん座談会 わが街 北新地を語る」、加藤進三、山田隆子、長瀧敏郎監修『北新地社交料飲協会五〇周年記念誌』北新地社交料飲協会発行、二〇一一年
- (5) 「北」の電話局番から推定。『萬華』は「川魚・鰻料理」「かき料理」「鶏肉料理」「天麩羅料理」「精進料理」「精肉料理」などの店や食堂や西洋料理、中華料理も載せる。
- (6) 大正七年、京都の国画創作協会の結成と同時期に結成された大阪茶話会の発会式は、堂島の魚岩楼で開かれ、記者会見が開かれた（橋爪節也「夜雨庵 北野恒富―その芸術と逆説―」、北野恒富展「図録、二〇〇三年」）
- (7) 宴席での腹の探り合いは、増富から近畿医大の岡野理事長に報告された。近畿医大の学長は、東都大学出身の七十歳を越した退官教授で、糖尿病のため長期療養中であり、同大学学長室で大和医大の織田学長が加わり、私学が連合した選挙戦の計画が練られた（第四卷二七章三三七頁）。
- (8) 「女系家族」は昭和三十七年（一九六二）から昭和三十八年（一九六三）に「週刊文春」に連載された。
- (9) 野上孝子『山崎豊子先生の素顔』文藝春秋、二〇一五年。
- (10) 「鶴の家の奥座敷に坐った鶴飼医学部長は、庭燈籠の灯りに眼を向けながら、気のない様子で、岩田の話を聞いていたが、聞き終ると、露骨に不快な顔をした。」（第一卷六章三七二頁）
- (11) 橋爪節也『原寸復刻「浪花百景」集成』創元社、二〇二〇年
- (12) 藤田儀三郎『大阪新町 高嶋座の事ども』为国印刷、昭和四十六年。
- (13) 「高麗橋のNビルにある河野法律事務所の応接室は、皮張りの安楽椅子と紫檀のテーブルがどっしりと置かれ、法律事務所というより、ホテルのような豪奢さであった。」（第四卷二四章一一五頁）。「高麗橋のNビル」は、安井武雄設計で昭和二年（一九二七）に竣工し、今も堺筋に建つ高麗橋野村ビルを連想させる。
- (14) 大阪町名研究会編『大阪の町名―大坂三郷から東西南北三郷へ―』清文堂、昭和五十二年
- (15) 宮本又次『大阪繁盛記』新和出版、昭和四十八年
- (16) 『宇野浩二全集』第一巻、中央公論社、昭和四十七年
- (17) 橋爪節也「忘れられた近代大阪風景―雑誌『道頓堀』に描かれた道頓堀と宗右衛門町―」、「大阪の歴史」六二号、大阪市史編纂所、二〇〇三年
- (18) 前註、『大阪の町名―大坂三郷から東西南北三郷へ―』
- (19) 喜久治とほん太の子供の臍の緒を包んだ奉書紙に生年が「大正十五年九月一日生」と記されている（「ほんち」二七四頁）
- (20) 芝田江梨「踊る芸妓たち―ダンスカンパニー「河合ダンス」、神山彰編『近代日本演劇の記憶と文化』忘れられた演劇』森話社、二〇一四年
- (21) 前註、「北新地ママさん座談会 わが街 北新地を語る」
- (22) 雑誌『道頓堀』のイラストによると、戦前は「キリン会館」の場所に「パウリスタ」（道頓堀・浪花座の東とは別の店）があった。
- (23) 前註、宮本又次『大阪繁盛記』
- (24) 「島之内」は、船場や天満と並ぶ大きな地域の括りであるが、現町名では、

大阪市中央区心斎橋筋、西心斎橋、東心斎橋、宗右衛門町、島之内の総称である。

(25) 前註、宮本又治『大阪繁昌記』

(26) 橋爪節也編著『映画「大大阪」 観光の世界―昭和12年のモダン都市―』

大阪大学総合学術博物館叢書4、大阪大学出版会、二〇〇九年

(27) 戦災焼失した太左衛門橋が、昭和二十三年に復活した時に南北が詠んだ句

(28) 「バー・シロー」の店名モデルの一つとして全国都市振興協会「大阪」の「キャバレー」広告欄の曾根崎新地「クラブジロー」をあけておく。

(29) 清水町を東に進んだ竹屋町五十番地（現・大阪市中央区島之内）に生家のあった私は、家の前の通りを「清水町」と呼んでいた。

(30) 織田作之助「世相」に「私は道頓堀筋を歩いているうちに自然足は太左衛門橋の方へ折れて行つた。橋を渡り、宗右衛門町を横切ると、もうそこは降り落ちたように薄暗く、笠屋町筋である。色町に近くどこか艶めいていながら流石に裏通りらしくうらぶれているその通りを北へ真っ直ぐ、軒がくずれ掛つたような古い薬局が角にある三ツ寺筋を越え、昼夜銀行の洋館が角にある八幡筋を越え、玉の井湯の赤い暖簾が左手に見える周防町筋を越えて半町行くと夜更けの清水町筋に出た。右へ折れると堺筋へ出る、左へ折れると心斎橋筋だ。私はふと立停つて思案したが、やはり左へ折れて行つた。しかし心斎橋筋へ出るつもりはなく、心斎橋筋の一つ手前の畳屋町筋へ出るまでの左側にスタンド酒場の「ダイス」があるのだつた。」とある。「夫婦善哉」でも心斎橋筋をこう横とすべきところを「戎橋筋をこう横「しる市」のどじょう汁と皮鯨汁」として、戎橋を起点に語る織田だが、右の「畳屋町筋」は厳密には「井池」である。

(31) 橋爪節也「大阪心斎橋専門商店案内」解説、「大阪春秋」第一七八号、二〇二〇年

(32) ベルリンの「ナイトクラブ・レジ」の天井は高く、客席は外国観光客で埋まっていた（第三卷一五章四九頁）。

「正面の二段になったステージには、ウォーター・ショウがはじまり、

軽やかな音楽に合わせて幾千条もの噴水が高く低く、緩急自在に噴き上り、眩いばかりのスポットが照らされたかと思うと、忽ち虹色に染められた水流が、きらきらと七色の光の帯を輝かせながら、壮大な水のショウを展開した。さらに音楽が高まったかと思うと、二段になったステージの下段に、水の精を連想させるような踊子たちが、七色の噴水を背景にライン・ダンスを踊り出した。音楽と水と人間が醸し出す見事なショウであった。」

財前は、テーブルに備え付けられた電話で他の席の女性に電話をかける「テレフォン・プレイ」や、「パイプのような円筒の口」から圧搾空気で相手のテーブルに手紙を送ることの出来る装置で、女性を自分のテーブルに招いて楽しむ。

(33) ドイツに到着した財前は、ハイデルベルグ、フリードリヒ・エーベルト街の「オイロップーシェ・ホーフ」(Hotel Europäischer Hof) を宿舎とし、夕食は、小説や戯曲「アルト・ハイデルベルク」(Alt-Heidelberg) で知られる学生カフェ「赤い雄牛」(Zur roten Ochsen)（第三卷一五章一五頁）でとる。国際科学会のレセプションは、ネッカー河に面したホテルの「ロココ風の華麗な大広間」(同前二五頁) で開かれた。

東ベルリンの「ドイツ科学アカデミー附属医学・生物研究所」(同前四一頁) を強引に訪問し、夜は前註に記したベルリンの「ナイトクラブ・レジ」に行く。

ミュンヘン大学で公開手術をし、有名なレストラン「トルゲルストーベ」で晩餐会が開かれ(同前六二頁)、ミュンヘン近くの「ダッハウ強制収容所」(同前一六章九九頁) では、ユダヤ人虐殺と人間の尊厳と死について思いを馳せる。

イギリス、フランスにも旅をつづけ、ソルボンヌ大学での国際生化学会に参加し、バスツール研究所、キュリー研究所を見学する(同前一七章一一六頁)。毎朝新聞のパリ支局長夫妻とパリの有名なレストラン「マキシム」(Maxims) で食事をする。レハールのオペレッタ「メリー・ウィドウ」の舞台でもある。その後、財前はオペラ座で歌劇「カルメン」を

鑑賞する。カルメン役はビクトリア・デ・ロス・アンヘレス、ホセはニコライ・ゲッダである。この二人が主演した「カルメン」全曲は、昭和三十四年にトーマス・ビーチャム指揮フランス国立放送管弦楽団の演奏でレコード発売されている。終演後、里見からの電報が毎朝新聞支局を通して届けられた。

(34) 『まちに住まう 大阪都市住宅史』

(35) 前註、『まちに住まう 大阪都市住宅史』

(36) 大阪空襲写真集編集委員会編『写真で見る大阪空襲』ピースおおさか(財団法人 大阪国際平和センター)、二〇一一年の堀江の写真を見ても焼失被害は大きい。

(37) 石濱恒夫は『大阪ろまん』の著者紹介で当時の住所を、「大阪市西区西長堀南通五の三モンス・アパート」(「マンモスンモス」の誤植)と記している。一九六〇年代に建てられた大阪市中央区瓦屋町の現オートセンタービルUR都市機構瓦屋町アパートは、私の生家に近く、当時から地元では「マンモス・アパート」と呼んでいた。

(38) 大日本塗料、関西ペイントなど大阪に本社を置く塗料会社は多く、塗料は大阪を代表する産業の一つである。

(39) 「R会館」での今津との打ち合わせは九章七六頁にもある。

(40) 大阪のホールに関しては、野口幸助「ホールの変遷と芸術文化の歴史」『大阪音楽会の思い出』大阪音楽大学、昭和五十年ほか参照

(41) 当日のライブ盤がキング・インターナショナルよりCD発売されている。KKC2183

(42) 『THE 30TH ANNIVERSARY HOTEL NEW OSAKA 創業30周年記念』株式会社新大阪ホテル刊行、一九六五年

(43) 上野正章「大阪における前衛音楽」、大阪大学総合芸術博物館叢書9『戦後大阪のアヴァンギャルド芸術 焼け跡から万博前夜まで』大阪大学出版会、二〇一三年ほか参照

(44) 山崎豊子「植林小説」「東京新聞」一九五八年九月二十五日・談、山崎豊子「山崎豊子自作を語る2、大阪づくし 私の産声」新潮社、二〇

〇九年に所収。

(45) 前註、野上孝子「山崎豊子先生の素顔」。なお、昭和三十七年八月十六日付「富士正晴宛山崎豊子書簡に「只今六甲で静養中、原稿は六甲へご返送下さいまし」とあるのはホテル滞在中だろうか。「李瑞華」山崎豊子から富士正晴への書簡等(1960年—1969年)について、「東アジア文化交渉研究」二〇一九年、関西大学学術リポジトリ

(46) そのほか財前が金沢の学会の帰り、昭和三十八年に完成した黒部ダムを見学し、地元ホテルに泊まる。翌朝「ダイニング・ルームの窓から、北アルプスの峰々が望まれ、鋭い稜線が雲一つない牙えきった空を明確に区切っている」(第五卷三二章一三六頁)という場面がある。

さらにホテルではないが、洛北大学学術会議選挙の対策で立候補者の神納教授、第二外科の村山、神経科の丸山、生化学の栗本、滋賀大学の石橋医学部長が、滋賀県大津市坂本の「昔ながらの小さな旅館」の二階に集まる。「比良の峰々が望まれ、湖面を渡って来る初夏の風が涼しい」座敷である(第四卷二六章二七四頁)。石橋は野坂と同郷で、県人会で一緒に「向うの敵情偵察」をしたとする。

(47) 佐々木商店に二十数名の住み込みの店員がいた。参考までに私の実家の橋爪塗装工業(廃業、現大阪市中央区島之内)は、東京オリンピックと大阪万博の間の期間に、最大十人の住み込み社員・職人がいた。多くは地方出身者で、二階建ての各階に六畳と四畳半があり、上下階の合計二十一畳(十坪半)を二段ベッドにし、洗面所、食堂は別にあった。佐々木商店は「敷地四十二坪、建物三十五坪の店」なので、二階を想定すれば建物の内部は数十坪あったと想像され、私の実家の数値を宛てれば二十坪ほどが住み込み店員の部屋となる。

(48) 財前の渡欧は、六月七日に伊丹空港から羽田に飛び、翌日のパンアメリカン機でドイツに向かう。帰国は、七月二十三日に羽田に到着し、翌日、伊丹に着く予定である(第二卷十四章三八四)。

(49) 心斎橋筋と三休橋筋に挟まれた南北の通り。北は土佐堀通り、南は、清水町を半丁南に入った畳屋町の北側まで。

- (50) 『京阪神便覧大阪市区分地図篇』昭文社、昭和三十五年
- (51) 同時代の名鑑等に佐々木商店と同規模の大阪の繊維卸関係を探してみたが、適切な事例は見いだせていない。もっと規模の大きな会社では、一例として一九六八年版の『会社総鑑「未上場会社版」』（日本経済新聞社）に載る大阪市東区北久宝寺町三丁目「天野金株式会社」があり、毛布、タオル、ベッドスプレッド敷布の卸・輸出で、大正三年（一九一四）の創業、昭和二十五年に資本金百五十万、昭和三十年に資本金二千三百万となった。従業員は男性三十名、女性十五名で、男性の平均給与が四万九千円である。
- (52) 前註、『まちに住まう 大阪都市住宅史』
- (53) 平成十八年に大阪市営地下鉄（現オオサカメトロ）今里線の「だいとう豊里」「瑞光四丁目」「井高野」の三駅が設置されたが、東淀川区内の地下鉄でJRや阪急との乗り換え駅はない。
- (54) 尼崎市立地域研究史料館ホームページ他参照
- (55) 『開局60周年記念誌 社報でMBSのあゆみ』毎日放送、平成二十三年
- (56) 大阪教育大学社会科教育講座地理学教室山田地理研究室「市町村別地形図空中写真のページ」参照。http://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~syamada/map_syamada/CityMap25k_syamada_map.html
- (57) 藤永田造船所が記された小野の詩、「向ふのあの鐵骨。どこだ。／藤永田造船だ。駆逐艦だ。／／澄んでるね／行つてみよう。」（「早春」より部分引用、／は改行箇所、『大阪』、『日紡』／浅野。／藤永田。宇治電。／一望工場地帯特有の葦原なり。」（風景（十二）より部分引用、／は改行箇所、／／は一行空け、『風景詩抄』）
- (58) 小野十三郎「葦の地方」よ、さらば」一九六五年、『小野十三郎雑話集 千客万来』秋津書店、一九七二年に収録
- (59) 筆者は「白い巨塔」が物語の進行と、読者が生きる現実の時間が並行して進んでいく小説であることを指摘したが、若干齟齬がある可能性を感じるのが、鵜飼医学部長の定年である。東の後任人事に触れて浪速大

学医学部教授の定年は六十三歳とされている（第一卷一章一二頁）。「白い巨塔」は昭和三十八年から昭和四十年に最初の連載がなされ、続編が昭和四十二年から四十三年に発表された。途中の準備期間も含めて足かけ五年を経ている。鵜飼は東の三歳年下なので、少なくとも物語後半、昭和四十一年には定年が来ているはずである。医学部長の要職にあり定年延長と解釈も出来るが、財前の遺体の病理解剖を執刀した大河内にも同じ問題があり、鵜飼の前の医学部長であることから大河内は、鵜飼と同年代であった可能性がある。特例で大学に残っていたということになる。